第三回 文芸思潮新人賞発表

文芸思潮新人賞

第三回文芸思潮新人賞に御応募くださいまして、まことにありがとうございました。今回は前回より微増の四四篇の応募数でしたが、少数精鋭と言うべく優れた作品が集まり、発想の鋭さ、また新しい視点や構想による作品が多数見られ、新人にふさわしい世界を開いてくれました。卓越した文章が目立ち、新世代の言語力を示していました。

九月末に予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八覚正大・小浜清志・五十嵐勉の選考委員による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

誌面の都合により、今号は優秀賞作品三篇だけを掲載させていただき、また次号以降に順次掲載の予定です。

授賞式・祝賀会は、申し訳ございませんが、今年もコロナウィルスの影響が尾を引いた関係から見送らせていただきます。賞状・賞品などは後日直接御本人宛てに送らせていただきますので、よろしく御了承ください。

なお文芸思潮新人賞は明年も枚数、締切、審査料などほぼ同じ要領にて募集させていただきます。どうぞまた奮って御応募ください。心からお待ちして申し上げます。

最優秀賞

該当作なし

優秀賞

「作品」
薛沙耶伽（東京都大田区）

「未踏の創造と死と」
渡部裕也（埼玉県さいたま市）

「宝を後にして」
壁 晃弘（鹿児島県霧島市）

「プリンセス・パラドックス」
倫子（大阪府守口市）

「白魔術」
中山喬章（京都府京都市）

※「宝を後にして」、「白魔術」の作品掲載は、誌面の都合により、次号に掲載させていただきます。

奨励賞

「ヒーロー序説」
見坂卓郎（神奈川県川崎市）

「アトラップ・レーヴ」
西上 礼（福井県三方郡）

「蒼い世界」
小田桐ユウ（千葉県千葉市）

佳作

「お客様の声」 卯月 律
「海が呼んでいるから」 松山尚紀
「ユウ」 山下止水
「初恋」 山中勇樹
「楽園」 木坂 京
「軍艦岩」 堀口現代人
「ジンクスの日」 米井暢成

選評

力作揃い

大高雅博

今回は力作揃いで、選考は難航するのではと思われた。

残念ながら最優秀賞は該当作がなかったが、優秀賞の中で、一番新人賞に近かったのは薛沙耶伽さんの「作品」だった。選考委員の中で、評価が二分したのは惜しかった。主人公は、妊娠七週目で、便器の中で胎児を産み落とすのだが、それは、胎児ではなく、芋虫のような別の生き物だった。それが「作品」で、それを育てていくのだが。小説は基本的には何を書いてもよく、どんな突飛なことでもそこにリアリテがあればよい。僕はリアリテがあると感じたが、最初の「作品」を産み落とすシーンは女性にしか描けないようなおどろおどろしさで男性選考委員は少し引いてしまったかもしれない。夫との出会いはマッチングアプリで、最初に会ったときは、花粉症でマスクをしたままというような今日的な出会いが面白い。夫はバイオアートの芸術家で結局、その胎児のような「作品」は、その主人の作品となりそうということで終わるが、その点につき選考委員から指摘があった。別物とはいえ胎児を作品にするのには、道義的な拒否感が生まれる。確かにそこは作り過ぎたかもしれない。上手の手から水が漏れるである。枚数の関係もあるが、父親がそれを見て、嫌悪感を覚え否定するところから始まる物語もあったかもしれない。

優秀賞の倫子さんの「プリンセス・パラドックス」は、安定した結婚を望めたが、その男を捨てた女が、以前に恋愛関係にあった女性のもとに走る、という作品で、こういう作品が、さらりと新人賞に応募されるということ自体、時代が変わったと思わせるものがある。ただ、それだけでなく、何箇所かとても良い表現があり、文章力でも評価された。しかしながら、時代はもっと、先に進んでいる可能性がある。最近読んだ本では、人の脳内では、男の部分と、女の部分が、モザイク状になっているという。脳内のほとんどが男や女というのは、ごく稀で、男と女の間にグラデーションができ、色々なヒトが存在するということになる。アメリカのフェイスブックでは、性別の欄では、すでに何十種類の区別があるという。頭では理解できるのだが、俄には全てを信じるには抵抗がある。ただし、そう考えると、色々と腑に落ちることもある。子供のうちはできるだけ性差をなくすような試みが出てきているし、それは全体に広がる可能性がある。古今東西の小説家が恋愛小説を書き、新しい恋愛小説は出にくい状態にはある。自覚した男と女の間にあるグラデーションの人々はどんな恋愛をするのだろうか、そこが、今後の小説の狙い目かもしれない。

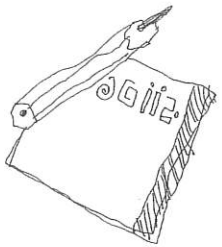
優秀作壁晃弘さんの「宝を後にして」は、ベトナムから来て、不法入国者となっているが真面目に働いている者と主人公は友人になる。彼を助けようとするが、失敗し、結局は彼は犯罪を犯してしまう。これも今日的テーマで、難民や外国者の労働者は、受け入れざるを得ないのに、政治家や官僚は硬直していて時代についていけなくなっている。外国人労働者に関しては解決の方法はあると思う。そのためにはこういう小説は必要である。題名と内容がマッチしていない気がするが。

優秀作中山喬章さんの「白魔術」は中山さんにしか書けないもので魔術師が面白く、もっと、その辺の分量を増やしてもいいんじゃないかと思う。自分にしか書けない場を持つことは良いことだと思う。ただ、自分が見つけた素材を、もっと深く掘ってみると小説が変わるかもしれない。

奨励賞の小田桐ユウさんの「蒼い世界」は多少毛色の変わった作品で、寮にいる主人公は、冬休みで、同級生が次々と帰省する中、一人残り、意味もなくロッカーに隠れてしまう。その衝動は分かる。そして、出られなくなるのだ。結局、管理員に見つかるのだが、一緒に掃除などしているうちに、何かを取り戻す。それはなくなった兄のことらしいが、詳しいことは語られず、ただ、兄の携帯に電話し続けることで、母親が気づき、寮に迎えにくる。母親と一緒に寮を出るところで終わる。かなりの文章力がある。何かもう少しなのだが、足りないのか、過剰なのか、その両方かもしれない。

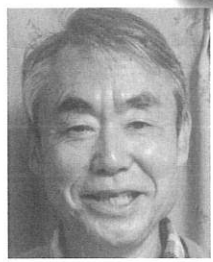
その他に、着ぐるみを被る人を描いた作品（見坂卓郎さんの「ヒーロー序説」）六本目の指が生えてきた男を描いた作品（友井コウさんの「Built-in Memory」）など面白い題材のものが多かった。

最初に書いた通りに力作が多く、今後に期待が持てると思う。頑張ってください。



盛り返した新人賞

八覚正大



前年度第二回の低迷に比して、今回は盛り返した感がある。全体を通して言えば、作者の内面における質的深さの熟成、それを表現として熱いメッセージに打ち出そうとした何作かに出逢えたのは、読み手としても楽しかった。

「作品」

出だしから、なかなか引き込まれた。妊娠、トイレでの流産〜でも、何か、違う、既存のそれとは全然違う！〈様々な赤色が混在する水溜りの中に、ぺしゃりとしぼんでしまったお祭りのヨーヨーみたいな袋が浮いていた……ややあってそのヨーヨーから魚のような生き物がどぅるりと出て来た〉……驚くような描写が続いて行く。〈その光景にはどうしようもない生のエネルギーみたいなものが満ち溢れていて、グロテスクさと神聖さがぐちゃぐちゃにまざりあって私を圧倒した〉そして、その肉塊？　を育て始めるのだ。

この数ページの描写、これはもう圧倒的に評者を打ちのめし、断ツにこの作品を推した。夫もまた変な人物で、それを観て〈眉間にアンモナイトの化石ばりの深いしわ〉を寄せる。彼は特殊なアート分野「バイオアート」の実践者……。結婚するに当たり、厳格な彼の両親に対し、〈私はネットを参考にしつつ嘘八百の家系図を自作した〉と。なかなか負けていない主人公。そしてラスト、その夫のノートに書き留められた言葉、〈ああ僕と妻にはこれから素晴らしい日々が待ち受けているだろう……人々を驚かせる作品が、ついにこの世に生まれたのだから……彼らはみな、僕の芸術活動について、色々と好き勝手に批評し気持ち悪がりながらも、愉しい恐怖を求めに来るだろう〉と。ここには、知性と、奇妙奇怪さと、おどろしさと、実存の不思議さと……それらを認知認識する「人間」というもののリアリティが、見事に描き出されている、驚いた。

「白魔術」

インドネシアの大学で、介護士として来日を希望する生徒たちに日本語を教え、かれこれ十年になる日本人教師の主人公。実は彼は東日本大震災の時のショックを抱え、それを癒す意味もあって当地に来てもいた。

そこでの関りや、日本語の直し方などの描写が面白い。

そして自らの精神的立ち直りを求めて魔術「ククワタン」を求めていく。かつて会った学生のシェトカは、生地へ戻ると別人になっている。〈目だ。目が違う。ギラギラと、燃えるように輝いているのだ。目に力が宿っているのだ〉と。土地の霊と繋がる癒しの力が漲っているようだった。

「宝を後にして」

希望に満ちて日本に来たものの不法入国者とされ、強制送還になるベトナム人。彼との関りを実録的に描いたなかなかの作品ではある。主人公は〈動ける人を集めて、いっぱしの街ならそこら中にある建設現場に雑工を送り込んで一人当たりの人夫代からピンハネをすることを主な生業とする会社〉の社員。その実態が描かれ、主人公は心に感ずるものがあり、最後は嘘までついて彼を庇(かば)おうとするが、ビザは認められない、そしてベトナム人は犯罪を犯してしまう……悲しい結末だが現実を見据えている。

「未踏の創造と死と」

自殺した芸大生と芸術工学の教授の話。〈最先端技術を有する先進国では、生まれた直後、脳内にマイクロチップが埋め込まれる。脳を補助するプログラムをチップに書き込むことで、人間の生産性を高めるためだ。〉という近未来のSF。

東条という学生が、「僕に残された創作はもうない」と言って飛び降り自殺する。そして教授は〈……彼が絵を見た時の脳の状態も、チップを取得したデータを使って解析済みだ。……抽象画を生み出す人工頭脳の開発も容易であった。……つまり今回の実験は成功だったと言える。狙いは芸術家から創造性を奪うことであった。……最終的な目標は、芸術界に居座る重鎮たちを東条〈自殺した芸大生〉と同じ方法で消し去り、人工頭脳と芸術とが交わる研究、それが許される状況を作り上げることなのだ。〉と。発想は奇抜だし、AIの情部門への進出も取り沙汰される昨今だが、死はそんなものなのだろうか、またその根底にある「恨み・復讐」のような部分が何なのか、〈芸術界の進歩を加速させるための、銀の弾丸〉という意味も伝わっては来ない気がした。

「ヒーロー序説」

〈「高校までは行っとけ」とうるさい父に渋々従って、高校卒業と同時に上京し小さな芸能プロダクションに入った〉主人公。うだつは上がらず、カブトガニの衣装を纏い、悪役の立場に甘んじている。〈布団にもぐると酸っぱい臭いがした。備え付けのエアコンはカタカタと小刻みに震えるばかりで部屋を冷やす気はないらしい。暑さのせいで寝苦しく、何度も寝返りを打っているうちに遠くの方からうっすらと眠気がやってきた〉と。

そんな中、バイト先の精肉コーナーのパックに穴が開けら

れているのが発見され、それが男の子の仕業と分かってくる……。その男の子はマイナーな悪役のカブトガニを応援し、自らの思いをパックにぶつけていたのだ。それを悟った主人公は、舞台の上から彼を見つけ『君の力を貸してくれ、さあ！』と舞台に引き上げる。その男の子は〈段ボールで自作したと思われるカニバサミ型のグローブを右手に装着していた〉。

そしてラストがいい。〈男の子は興奮したのか顔を赤くしてキラキラした目でおれを見上げている〉。社会的善悪のまだ分からない子どもを、そのマイナーでも純真な心を知って守ろうとする「大人の優しいまなざし」が光っている。この作品を読みながら、遠い昔、灰谷健次郎の「ウサギの眼」を読んだ記憶、そして開高健の「裸の王様」に感動を禁じえなかったことを思い出した。

「プリンセス・パラドックス」

ミルクパズル――〈それらは、ジクソーパズルのピースだった。彩はなく、白でできていた。……絵の描かれていないパズルのこと〉と。そしてその後の〈弾ける泡を立てるミルクを確認し、火を止めた。熱く、白いミルクを白いマグカップに注ぐ。白と白。空を踊る熱い液体と、ちょうどふさわしい重量の音を伴って割れる個体。白い破片で割れる体は、赤を流して抗する。……〉の描写は良かった。ただ、女同士の愛、そこに男も入りつつ、やはり女同士の――という感覚が分かり得なかった。

「初恋」

幼い時に出逢い、同窓会で再会し恋をするものの、その女性とは別れてしまう。〈ケンジは目を見開いた。そこにいたのは別人だった……。あの日、やわらかい日差しがふり注ぐ部屋で目にしたもの。華のように可憐で、凛とした、たしかなもの。失われないはずのもの。しかしいま、目の前にいるのは、ただの一個の、女だった〉という描写は、リアリティをもって突き刺さってくる。しかし作品としては場面、状況の描写が乏しい感が。

「海が呼んでいるから」

精神病で就労施設に務めている男性が主人公。知り合った男と海へ行く。幾つかの章に分かれ、エピソードは面白いが、展開がなかった、もっと書き進めて欲しかった。

「豪雨」

沖縄戦の祖父からの話、良くは描けている。〈そのまま、寝転がっている妹の横で、僕は……遠くで聞こえた砲弾の音が、かなり近くで聞こえた。……命までも理不尽に切り裂く恐怖そのものの音だった……自然の驚異にはない不快な重圧を感じた。〉そんな表現には臨場感があった。ただ、新しい視点が読みたかった。

「Built-in Memory」

六本目の指が生えて来る――というのはぎょっとしたが、夢や空想より、現実のリアルさをもっと読みたかった。

「アトラップ・レーヴ」

ちょっと洒落た小説で、タイトルを含めフランス語が幾つも出て来るが、言葉に比してその感覚のリアルさが、あまり伝わってこなかった。

「蒼い世界」

雪の描写はなかなか読みごたえが感じられた。〈新しく降り積もった雪が現実のものとは思えないほど蒼く……一瞬たりとも明滅の瞬きを止めることはなかった。……月明かりの中で読む小説は、まるで薄暗い深海で読んでいるような気がした……〉。管理人との話もけっこう描けてはいたが、なぜ一人寮に残っていたのか、理由が伝わってはこなかった。

次回をさらに期待したい。

驚いた文章レベル

五十嵐 勉

第三回「文芸思潮」新人賞は、すでに下読みの段階で、驚かされた。応募総数四四篇は、昨年の第二回の応募数四一より若干増えている数字に過ぎない。驚かされたのは、その内容である。下読みの段階では、A、B、Cで評価する。AまたはA×がだいたい最終選考候補になる。B◎も他の選考委員に読んでもらった方がいいと思われる場合は残す。そうした選別を経て普通最終選考に残るのは、一割ほどである。他の賞、例えば銀華文学賞や、エッセイ賞や、現代詩賞の場合はほぼその割合である。ところが今回の新人賞の場合、A、A×が二四、B◎が一六、なんと四〇篇、九割が最終選考候補と言っていいレベルの高さだった。残すのは数ではなく、作品の質なので、理論上は全部がAということもありうる。しかし現実がそれに近いものになったことには、驚いた。この新人賞の応募者数の少なさはおそらく日本の公募文学賞の中で一番であろうが、作品のレベル

の高さの割合は逆に最高であろう。ここまでレベルの高い作品が集まってくる理由はいったい何か、しばらく考え込まずにはいられなかった。うれしい応募状況である。

何よりも、文章がいい。濃密で、思索の裏打ちがあり、彫りも深い。SNSや投稿サイトで見る軽薄な文章群とは対極的なみっしりと充実感のある言語群である。銀華文学賞のトップレベルか、中にはそれを凌駕すると思われるほどの質の高さである。若い世代への言語力の信頼をいだかせる力量を示している。惜しくも佳作になったが「軍艦岩」（堀口現代人）の思考の手で匍匐するような彫り深い文章や、「蒼い世界」（小田切ユウ）の寮の日常風景に開かれる外界の白と蒼の光景描写などは、優れた文章と言える。「アトラップ・レーヴ」（西上礼）、「楽園」（木坂京）、「初恋」（山中勇樹）なども一つのトーンを有したスタイルに魅力が溢れていた。ストーリーや構成を整えればもっと実力が発揮されるはずで、今後に大いに期待できる。また「ジンクスの日」（米井暢成）なども、構成技術の斬新さは、銀華文学賞ではお目にかかれない大胆な試みである。これに劇的クライマックスを周到に用意すれば、衝撃的な作品になったかもしれない。

中でももう少しで最優秀賞に手が届きそうだったのは、薛沙耶伽氏の「作品」で、文章力、ストーリー、題材のインパクトなど、力量は十分窺われ、選考委員の半数は最優秀賞に推したが、わずかに残りの半数の同意が得られなかった。そのあたりの事情に触れると、まず、この小説の良い点は、着眼も現代性も鮮やかで、読ませる力、組み立てる力は群れを抜いているということにあった。しかし二、三ヶ月の半胎児の流産の有様が、果たして現代の水洗トイレで、手に掬いとることが可能かどうか、奇異なグロテスクさと同時にそのリアリティの薄さが気になった。むしろこの作品で吸引力があるのは、婚約の過程と、姑のキャラクターである。夫の職業が、コンピューターによる芸術作品作家というのも、ややリアリティが希薄で、この胎児が素材として完全に組み込まれ、その死が生命の「作品」として完成する結末に、何か機械的な人工の冷酷さを感じてしまうことに、疑問が残った。生命とはこういうものだろうか。電子作品に昇華しきれるものだろうか。筆者の母性を含む生命観に、ふくらみや優しさが遠のいていることに、理知への過度の傾きを感じた。造形力や素材への眼は、すでにプロとしてやっていける力を示している。書くことへの姿勢を見つめ直して足元を固めてやっていけば、やがて広く注目される存在となるかもしれない。

渡部裕也氏の「未踏の創造と死と」も、芸術とコンピュータの関連にアプローチしている舞台は共通している。芸術家の死がかかっているという点、先端性という点では、こちらの方が尖鋭かもしれない。脳に埋め込まれたチップによって、芸術創造の秘密に迫る剔出度は、鋭利である。芸術創造の秘密をコンピュータによって完全に解析する近未来を表しているが、逆に人間が解析の対象として痩せ細ってふくらみをなくしている。機械による解析によって、人間が痩せ細っていく現象を、期せずして、伴ってしまっている。作品のこの面をいまさらどうすることもできないが、あえてそれを受け入れた上で、鋭さを買い、なおかつこういう重要な問題が人間に迫っている喫緊性を提出していることは、評価できた。

中山喬章氏の「白魔術」は、インドネシアの風土呪術を題材にしていて興味深い。特殊な祈祷によって肉体が強固になり、想像を超えた治癒も現実になる熱帯の風土の特異性がよく出ていて、現代文明への思わぬアンチテーゼを突き付けてくる。筆者のインドネシア体験をよく生かして、反文明の視点を提出し得ている。ただ、前半でインドネシア人の履歴書を書く学生たちの幼稚な面など、長過ぎて、なかなか本題に入っていかない点、主人公の福島原発のトラウマを出すのが遅過ぎ、最後の、魔術によって魂が時空を超えて福島に帰り、トラウマが晴れるという肝心な結節が弱いので、腰を入れて直す必要があるだろう。この題材は、極めて今日的なテーマを含んでいることから、ゆっくり手を入れて、完成させて発表してもらいたい気がする。

「プリンセス・パラドックス」は、女性同士の恋愛の復活を描いて、題材そのものが新鮮だった。筆者の倫子氏は、文章感覚もよく、執着する心理もきめ細かく作品に織り込んでいて、味わい濃く流れを匂わせている。ただ、前の作品の段階では恋人が女性同士であることが、なかなかはっきりせず、これをそのまま男女の愛としても十分成立しそ

入選

「豪雨」　ソウダソウ
「Built-in Memory」　友井コウ
「ライト」　鏑木一京
「私を呼んで」　夏野抹茶
「火あそび」　金子　月
「学者を求めて」　かきあげあゆみ
「某の欲望」　佐藤龍一
「語るべきこと」　初鳥卓真

うにも思えた。女性同士でなければ出てこない世界をもっと濃密にしてもよかったのではないか。しかしこの領域の恋愛を、ここまで正面切って打ち出してきたのは、「文芸思潮」新人賞だけでなく、銀華文学賞を含めて初めてなので、若い力として注目したい。

壁晃弘氏の「宝を後にして」は、アルバイト現場で仲良くなったベトナム人の労働者との付き合いを通して、不法労働者の苦しい立場と国外退去の過程を描いて、切迫性があった。日本の出入国管理の冷酷な現場をここまで伝えている作品は稀有だろう。借金をしてベトナムから日本へ来、苦しい中でベトナムの家族に送金する外国人労働者の実態は、よく聞くようで、小説としてはなかなかお目にかかれない。その意味では、体験的な事実も散りばめられたいい作品になっていると思う。ただし、タイトルはいただけない。「大宝建設」で働いていて、「従業員こそ会社の宝」という社是にしか関連が求められず、テーマとあまりに離れているタイトルは、作品を貶める。

全体に、今回の新人賞は少数精鋭の文章軍団のような印象を持った。若い世代にこうした真の文章創作の力を持った書き手が少なからずいるという確信は、今後に大きな期待を持たせる。将来日本文学を背負っていけるだけの実力が層として存在している希望を抱いた。ただ、タイトルの付け方は共通して拙劣なので、テーマをしっかり象徴する言葉を選んでほしい。タイトルが難しいのは事実だが、創作を重ね、他者からの声も入れることで乗り越えられると信じている。

不謹慎だが、銀華文学賞と新人賞をどうしても比較してしまう。銀華文学賞を白組、新人賞を紅組とすると、第一回目は紅組の旗色がよく「出所証明」一作でかろうじて持ち直した。二回目は圧倒的に白組の勝勢、今回は、白組の勝勢だが、応募数の少なさからすると、実質的には、かなり肉薄している。もし応募数が増えたらどうなるか、楽しみなところではある。

出来の良い作品が多かった

小浜清志

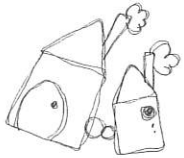
今回も出来の良い作品が数多くあり、文学の裾野の広がりに驚嘆した。しかしながら特出した作品の出現しなかった事は残念であった。得点的にはいいものの、訴えてくる何かが足りなかった。構成や筆力に秀れていても作品の輝きがないのは何故だろうかと考えてみた。書き手そのものが作品にのめり込んでいないのではないのだろうか。シビレエイは自らがシビれているからこそ他もシビれさせさせると言うコラムを読んだことがあるが、作者は自ら選んだテーマにシビれなければいけない。もしくは書きながら思索が深まっていったという過程があれば読み手は必ず惹かれるものである。書きながしてはいけないし、ましてや推敲の有無がどれほど重要であるかを知らなくてはいけない。

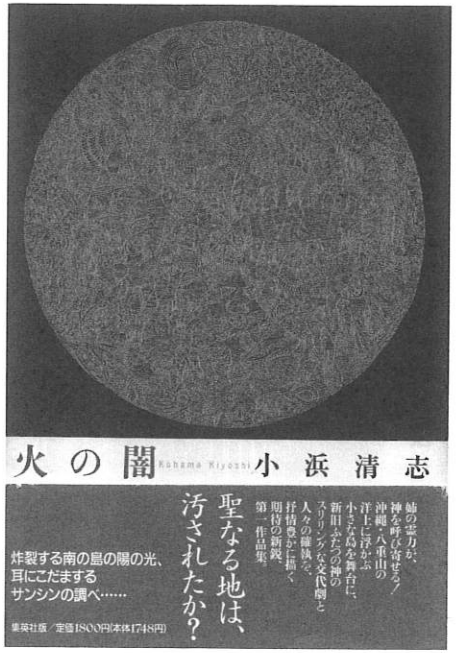
「作品」であるが、奇抜な発想と独特の世界観に舌をまいたものの、発想を結びつけるのに腐心するあまり質を下げてしまったのが欠点であった。テーマは時間をかけ、熟成させるものであり、思いつきで書きあげても底の浅さだけが目立ってくる。日ごろからうたがっていることや、遠い日に受けた感銘などを書き止めて作品にすれば秀作が生まれるはずである。

「軍艦岩」は何故台湾でなければいけないのかが省かれていて精彩を欠いてしまった。本気を感じさせる筆力であるが、このような文章は文飾になる可能性もあるので要注意である。

「宝を後にして」は日本に働きに来た外国の若者たちを描いた作品でリアリティーもあり読み手もうならせる技法もあった。しかし、このような人たちを知っていますという作風に流されたのが惜しい。もう少し交流関係も広げていたらよかったかもしれない。

「プリンセス・パラドックス」は非常に複雑で味わいのある作品で、私は最も高い評価をした。次作を是非読んでみたい。これからも書き続けることを期待している。





集英社刊

作品

薛（せつ） 沙耶伽

妊娠七週目のことだった。私は便器の中を覗き込んでぎょっとした。様々な赤色が混在する水溜まりの中に、べしゃりとしぼんでしまったお祭りのヨーヨーみたいな袋が浮いていたからである。ややあってその球体から魚のような生き物がどぅるりと出てきた。子どものとき肌身離さず持っていたピンク色のミノムシみたいな形のおまもりのなかにはいっている、水晶か何かの石を掘ってかたち作られた小さな神様の人形を好奇心によって出してしまったことがある。そのときと同じ、見てはいけないものを見てしまったという後悔に襲われた。性教育の授業で見覚えがある、教科書の見開きいっぱいに描かれた生命誕生の図式がフラッシュバックする。精子と卵子が出会い、両者の核が融合した受精卵が次々に細胞分裂を繰り返し細胞の数を増やしていって、ヒトの胎児のかたちに徐々に変化していく過程。構造は頭で理解できるのだが、その現象が実際に自分の中で発生し、刻一刻と変貌をしていることを考えるだけで吐き気と眩暈に襲われてしまう。

もしかして、流産。妊娠検査薬で陽性を示す頼りない一本の線。それがふらりと枝垂れ柳のように表れてからというものの、その残酷で薄情な響きをもつ二つの漢字がいつも心のどこかに厭らしく付きまとっていた。そしてそれは、鋭利なくちばしをもった鳥のように目にもとまらぬ速さで脳裏をかすめていった。べつに滅茶苦茶子どもが欲しいというわけではないし、母親になるという覚悟もできず宙ぶらりんな心境でいる。だからちっとも悲しくなんかないはずだ。それなのになんだかとってもつらい。ダムが決

壊する一歩手前のような気持ち。このままトイレの銀色のレバーを半回転させて流してしまおうか。よく目を凝らさないと見えないほどの大きさで、どうしてよりによってその存在にめざとく気づいてしまったのだろう。突然のことに困惑して、さらに身体が疲弊しきってしまっている。トイレの床にへたり込んだまま、朦朧とした頭でそんなことを思った。しかし思考とは裏腹に、手が突き動かされるみたいに勝手に動いて、気づいた時にはまっかに染まった白いつるりとした便器の中にいるそれを恐る恐るつかんでいた。私はもはや私ではなかった。そのおかしな色の水の中に手をつっこむと文字通り身の毛がよだつような感覚に襲われた。ああ、つい声が漏れ出てしまうような厭なつめたさだった。そのタンクの中の水は、とほうもなく不快な温度で私をみじめで泣きたい気持ちにさせた。

暫くしてそれが、びくん、と小さく躍動した。産声ではなく鼓動でもない、しかしそれは生の幕開けとともに開始される踊りに違いなかった。その刹那水がちゃぷんと波打ち、石榴色の光を閉じ込めながらきらめき揺れた。

その芋虫もしくは魚のようなかたちをしたものには、黒ゴマのような目がついていた。それは丸まった姿勢のままもぞもぞと動くと、今しがた自分が出てきた三センチに満たない赤黒い塊をすこしずつ、コンスタントなペースで食べていった。その光景にはどうしようもない生のエネルギーみたいなものが満ち溢れていて、グロテスクさと神聖さがぐちゃぐちゃにまざりあって私を圧倒した。あまりにも動物的、息をのんだ私は思わず目を背けたくなってしまった。その行動は人間からほど遠くにかけ離れている。祖父母の家の庭にすみついていた野良猫が出産したとき、あかちゃん猫とともに出てきた胎盤をぺちゃぺちゃと食べていた光景がフラッシュバックする。幼稚園児だった当時とても衝撃的だったその記憶は、きちんと頭の中のどこかにしまわれていたらしい。そんなことすっかりと忘れて、大人になって好きなものや選りすぐりの記憶だけに囲まれて生活をしていた。思わず便器の中に吐きそうになって、右横にあったトイレットロールを急いで大量に手繰り寄せ、それで口元を覆うと胃袋がぎゅうんと収縮し痙攣した。せりあがってくるような不快さが到来したのちに、薄山吹色の酸っぱい胃液が申し訳程度に出てきた。荒れ果てた高温の砂漠の枯れ木みたいに、喉の奥の器官がひりひり灼ける感覚が続いた。

依然として子宮は刃物でめった刺しにされたようなひどい痛みを伴っている。毎月の生理は重いほうだけれど、それがまったく比にならないくらい、今まで体験したことのない痛みである。

見るとトイレの水溜まりには、私の体液がなみなみにそそがれている。まるで自分という人間が真っ白な陶磁器の

水洗トイレになってしまったような気がした。私の心、みたいな重要な核の部分がトイレにすっぽりと移し替えられてしまって、さきほどまで便座に座り込んでいたはずの肉体から意識という意識がすべて抜け落ち瞬間的にモノへと幽体離脱をしてしまったかのよう。

身体の内側がぼろぼろで痛くて惨めだった。さびしさだけが白く白くきわだって、おもわず便器に抱き着くように腕を回し力を込めた。内臓が寂しい痛みを発信していた。まるで真っ暗な夜の海で遭難したボートから発せられるモールス信号のように。いつまでもぬくもることのないだろうその温度と感触にとてつもない親しみをおぼえる。このままこの硬くてつめたい器と一体化できたいらいいのに。そうして私は私を何度も流してしまいたい。この異質な生き物とともに、長方形のタンクいっぱいにたまった体液で、じゃあっと。そんなことを考えていると、泪がだらだらと眼球から垂れてきて頬を勢いよく伝い顎から便器の中に滴り落ちていった。あふれた泪はずるずるの粘り気のある透明な鼻水になって、その透き通ったあかい海底に降り積もっていく。いろんな体液がぐちゃぐちゃに混ざり合い、水かさが静かに増えていく。体から依然として流れ出ているそれは百種類以上の赤やピンクを織り交ぜたような複雑な色をしていて、水の中にやさしく溶かれた水彩絵の具のようにトイレの水と混ざり合い、どこまでも透き通っているように見えた。体液ってうす黄色っぽいのものかと想像していた。

最初のびくん、がさらにびくびく、となりそれが徐々に動きの回数を増していき断続的なリズムを持って躍動を続けた。私の体液の中でのたうち回るかのように全身をばたつかせているその生命体を、あらためて凝視する。一体全体これは何なのかという混乱と畏怖。残念なことに、かわいいとか慈しむとかそういった母性にまつわる感傷はまったくといっていいほど湧いてこなかった。まあ、当然といえば当然かもしれない。むしろ不気味でたまらなく、怖いもの見たさの一心で観察してしまうと言った方が正直でいいだろう。

体全体は赤みのかかった橙色をしている。さきほど初めて体内にものを取り込んだせいで、腹部がこれでもかというくらいに膨張している。生後間もないのにそんなに動き回ったら死んでしまうのではないか、と心配になって、私は再びひとさし指をつっこんで、水面にゆっくりとひとつの波を立て、その振動で彼もしくは彼女の動きを落ち着かせようと試みた。

洗面所にあった歯磨き用のコップを持ってきて、一センチにも満たないそれを体液ごとざばりと掬いあげる。すると忽ちぱたつくのをやめて奇妙なほどに静止し、そのまま音もなくコップの底に沈んでいった。とりあえずはそのコップを臨時のベビーベッドとすることにしようと決めた。

そうやってからトイレのレバーを押し下げ、体液や便器の中に飛び散った血液を流した。しっかりと手を洗い、新しい下着に取り換えてショーツにはナプキンをつけた。まだどろりとした血液のようなものが膣から流れ出てきている。きっと子宮のなかの壁がめりめりと崩れ、剥がれているのだろう。

そうして私は何事もなかった風を装って、プラスチックのコップを片手にリビングへ行き夫にニュースを告げた。彼は料理をしながら、YouTube で coba のミックスリストを流し（『遠くなる街』が終わり、けたたましい消費者金融の五秒間の広告を挟んで『Saran』がはじまった）、安物のリースリングをひどく美味しそうに飲んでいるところだった。マスクは顎にぶら下がるようにかけられていた（彼は家の中だって医療用のマスクを着用しているのだ）。そういえばこの人の顔をひさびさに見たかもしれない、私はまじまじと彼の顔下半分を観察した。やっぱり魚類に似ている。こちらの視線に気づいたのか、マスクをずり上げると几帳面な手つきで鼻まで覆った。

閉じ込められた鍋の中で油と水が自由に跳ねまわる陽気な音がしている。そのアコーディオンの音色は、何万本の色鉛筆をそこらじゅうに転がし敷き詰めたような、外国の石畳の舗道を連想させた。

「そういえば僕たちはぎりぎりでイタリアに行けなかったねえ。いつになったら行けるんだろうか。でも今後しばらく旅行や外食は無理かなあ。子どもが大きくなって旅行に連れていけるのとコロナが収束するのはどっちが先かな」

どうやら夫はコロナウイルスの流行のためキャンセルした新婚旅行のことを言っているらしい。私たちはヨーロッパに行ったことがない。

「ねえあのね、驚かないで聞いてほしいんだけど。産まれたの」

あかちゃん。そう言うとキッチンで料理をしていた夫はおたまをもった方の手を空中で止め、一連の動きがばらばらに分解されてしまい壊れたロボットみたいなおかしな挙動をした。そういえば、妊娠が発覚して伝えたときも同じような反応をしていた気がする。

「どどど、どういうこと」

夫はたちのわるい冗談はやめてくれよとでも言いたげな目をして、激しくどもりながらも疑問を呈してきた。

「そ、それで、どこにいる？」

それもそうだろう、私は透明なコップに掬いだした生物を見せた。私たちの子どもはコップの底で何かに耐えるみたいにじっとしていた。入れ物が湾曲しているせいか、実物よりも少しだけ大きく、ぐにゃりとして見えた。

「……」

夫はコップの中に沈澱している赤みがかった肌色の生命体を見やり、眉間にアンモナイトの化石ばりの深いしわを寄せた。私は夫の手に握られていたおたまを取り上げ、蓋を取って鍋の中の力作――真鯛のアクアパッツァ――をのぞき込んだ。まだアルコールの蒸発しきっていない、つんとした香りが鼻を刺す。同時に電子レンジで空の器をかるく温める。それは夫のいくつもあるこだわりのひとつだからだ。

えっ、この水ってなんかあかいけど水道水？　カルキ抜きとかしなくて大丈夫なのかな、夫がぶつぶつ呟きながらコップを蛍光灯の光に透かし、難問のパズルを解いているみたいな顔で我が子だと提示された生き物を凝視する。

「人間の胚みたいにも見えるし、魚の胚みたいにも見える」

理解の範疇をはるかに超えている、といったように彼は五秒ほど唸り、その声にならない低音は口元を覆う布をこまかく振動させた。もしかしたら彼は感動しているのかもしれなかった。

これは紛れもなく自分の子どもだという薄ぼんやりとした自覚と愛着が、みぞおちのあたりから徐々に立ちのぼってきた。安直だと言われるかもしれないけれど、それは本当にそうだから仕方ない。その感情はまったくの初めから細胞にちゃんと組み込まれていて、今の今までずっと眠っていたのかもしれない。

あかちゃんやあかんぼうという言葉は、その生き物が赤いことから由来しているらしい。広辞苑に書いてあったので、正しいのだろう。だからこれもいちおうあかんぼうか、と思うとひとりでに笑いが出た。夫が何とも言えない顔をして、コップに入った子どもと一人で面白がっている私とを、交互に見比べていた。

そのようにして、私たちの子どもはひとつぶの雨粒がぴちゃんと水たまりに飛び込むみたいにこの世に生を受けた。その生命体はひどく弱弱しく、今にも息絶えそうで恐ろしかった。しかしその謎めいた命が生き続けるということを考えると、果てしない恐怖があった。お祭りのときに欲しがった不健康なひよこや金魚を、家に持って帰ってきて、はたと途方に暮れるあの感じに似ていた。どうして私は何も見ずにトイレのレバーを流してしまわなかったのだろうか。

私たちは終ぞアクアパッツァに手をつけず、いつもより会話もずっと少なく、それぞれシャワーを浴びて就寝の支度をした。ぴんとラップをかけられた皿の中に、真鯛の切り身がトマトの赤い海に溺れ、オリーブ油が夢の泡沫のように表面にうかんできらきらとし、遠くで夫が髪を乾かすドライヤーの音がごうごうした。

眠りに落ちる前にふと考えごとをした。そもそも、私はどうして妊娠、もっとさかのぼるならば結婚なんて面倒くさいことをしてしまったんだろう。隣では夫がぷかぷかと鼾をかいていて、あきれてしまうくらいに楽天的なこの人の性格が腹立たしく、同時に羨ましいと思う。寝室のベッドサイドテーブルに置いた、子どもなるものを入れたコップは不気味なほど静まり返っていた。朝になったらすべてが解決していればいいのに、と私は目を強くつぶり布団をかぶった。

夫と出会い結婚するに至った経緯の発端は、興味本位で始めたスマートフォン向けのアプリだ。所謂マッチングアプリといったもので、そのサービスは「真剣交際」「本気の婚活」「大人のまじめな出会い」「毎月八〇〇〇人に恋人」を高らかに歌っていた。「大人のまじめな出会い」がいったいどのようにまじめなのか、また「毎月八〇〇〇人に恋人」という膨大な数字は果たして個々人の成果に深く関係しているのか、まったく見当もつかなかったけれど星の数ほどあるマッチングアプリや出会い系サイトの中で比較検討を行った結果、とりわけ信憑性が高そうだと感じられたので、私はそこに自分の断片的な情報のいくつかを登録することに決めた。なんでもAIが自分の理想的な相手を抽出してくれるという、ハイテクかつ画期的なサービスが提供されているらしかった。AIは驚くべきスピードで私の好みの男性の情報をぐんぐん学んでいき、来る日も来る日も新しい男性の候補を携帯電話の画面上に映し出した。

無味乾燥な紋切り型のメッセージのやりとりをいくつか重ねたあと、向こうから、「会ってみたいです」と言われたので実際に会う約束をした。

うららかな気持ちのよい日曜日、十二時ぴったりに恵比寿のガーデンプレイスの広場で待ち合わせをしていた。

その日の私は紫陽花色の膝までかくれる丈のワンピースを着て、ストッキングに三センチヒールのグレーのパンプスを合わせた格好をしていた。身長が百六十五センチあるので、高いピンヒールを履くと初対面の男性に「なんか強そう」と敬遠されることがしばしばあったからだ。背中までのばした茶色の髪はだらしなく見えないようコテで毛先をワンカールさせて、まつ毛の一本一本にマスカラの黒い繊維を丁寧に塗り付けた。ハイブランドのバッグは持たず、ネイビーの小さめのバッグを持ち、手首にはアップルウォッチを巻き付けることで「お高い女」と思われないように演出をした。いかにも育ちのよさそうな、上品でこなれた女性のコーディネートとしてはまずまずの出来映えである。

初めて会ったとき、彼はペールグリーンの不織布のマスクをしていた。なんだか病室のカーテンみたいな色だと

思ったのをくっきりと覚えている。私は子どものころに母が入院して、お見舞いに行った時のことをふと思い出した。

「か、佳渚さんですか？　ぼぼ僕、筒井京平と申します。あの、すみません。ひどい花粉症、なもので、マスクがどうにも手放せなくて……」

彼は銀色の時計台が反射した光に、ちょっとまぶしそうに目を細め、何度か言葉に詰まりながらもそう弁明した。そしてこのように吃音が出ることを付け加えた。ラルフローレンの真新しい紺色のシャツを着ている。

「き、今日は佳渚さんがキレイな人で、それにしょ初対面で、……き、緊張しているというのもあるみたいです。あっ、あの、これはおお土産です」

好きな食べ物にドーナツとプロフィール欄に書いてあったので、と彼は言い、ずっしりと重いドーナツの箱が入った袋を手渡してきた。ドーナツが好きなんて書いたっけ？

と内心首をかしげつつも、クリスピークリームドーナツ大好きなんです、とありがたく頂戴した。ふんわりと甘い、砂糖の香りが鼻孔をくすぐる。袋を覗き込むようにして箱の中を見ると、オリジナルグレーズドのドーナッツが整然と入っていた。全部で七つ。一人暮らしにはいささか多いな、と私は思った。

非常に感じのよさそうな、清潔そうな人だというのが第一印象だった。流行りのスタイリッシュな家電みたいな、無機質な感じが漂っていた。よく見ると奥二重ですっとした切れ長の目と美しい眉間をしている。かたちのよい額はとりわけ狭くも広くもなく、完璧な丸みを帯びて、その眉間へとつながっていた。やわらかそうな黒髪はところどころくるくるといろんな方向に向かって丸まって、そのいくつかが束になってふわふわと風に吹かれていた。どうしてこんな人が、マッチングアプリで「大人のまじめな出会い」を見つける必要があるのだろうか。実は極度の潔癖症とか？　それともモラハラ男とか？　私は心底不思議に思いながらも、これはなかなか悪くないかもしれない、でもまだまだ予断は許されない状況だと思った。

「ずっとつけていて、息苦しくないんですか？」

「いいえ、まったく」

中学生の時に花粉症とハウスダストアレルギーをダブルコンボで発症してからというものの、それからどこにいるにもずうっとつけているのだと彼は言った。もはやこっちのほうが通常装備のような感じで、マスクをしていないとぎゃくに落ち着かないくらいだ、とも。

たしかに吃音はあるけれど、彼はよく通るいい声をしていた。マスクをつけていても相手にちゃんと届く発声の仕方を習得したのかもしれない、そう思うと同時に彼のバックグラウンドや生い立ちについて勝手に妄想し、そしてそこに悲観的でドラマチックな陰影をつけてしまいそうに

なってあわてて止めた。それはすばらしく悪趣味な私の癖なのだ。

「あ。……ああこれは、びょ病院のです。う、うちが、やっているびょ病院です」

マスクの右下に病院名とマークが型押しされている。空想に耽りかけてぼんやりとさだまらず浮遊した私の視線をマスクあたりに感じとり居心地が悪くなったのか、彼は丸い花のようなマークを指さしそう説明した。話によると彼の実家は長野にあって、そこそこ有名な病院（田舎なので大したことありません、と彼は謙遜した）のようだった。病院の宣伝にもなりますね、と私が適当な冗談を言ってあげると彼はふふふ、とマスクを震わせてその振動を肩までおくりとどけるようにして笑った。一見目元だけでは笑っているのか瞬時には判断がつかなかったけれど、その一定のリズムをもった振動は隣にいる私に空気をぴりぴりぴりと震わせながら、それが彼の楽の感情であることを確実に教えた。器にそそいだ感情がいっぱいになってすこしずつ零れていくような笑いかただ、と思った。

「すごい。じゃあ、京平さんもお医者さんなんですか」

「……いいえ。僕は美大を出ました。あ、ああ、ああああ、アーティストになるのがゆゆ夢なので」

アーティスト、というところで彼は盛大にどもった。

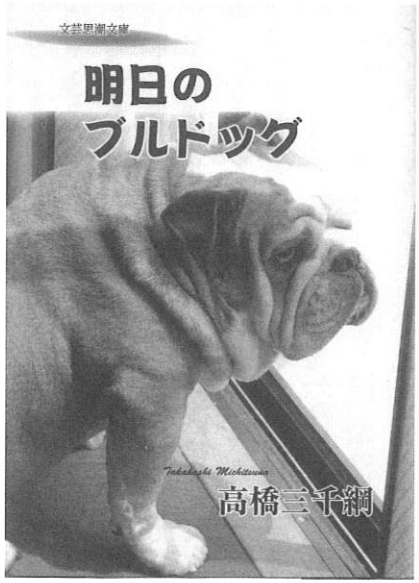
「そうなんですか」

「びび、美大に行くことに、両親はそりゃあもう大反対しました。僕以外は全員医学部に進学していて、病院関係の仕事に就いているからです。今でもよく思っていないみたいですが、それはそうでしょうね。僕は彼らにだいぶ援助してもらっているから、反論する権利がないですけど」

「どうしてそれになりたいんです？」

「わ、わからない。でも僕にはそうするしかほかに方法がないんです。言葉以外の方法を使用して、伝えたいことを伝えるには、自分の作品を生み出してそれに頼るしかない。笑われるかもしれないけれど、それは僕にとって切実な問題なのです」

その気持ち、わからないでもない。でもきっと彼はさっき会ったばかりの私が共感したところで、嬉しくないだろ



税込 500円
御注文はアジア文化社まで

うと思ったので、何も言わずに微笑んでいることにした。
そんな話をしながら、予約をとることが困難で有名なハンバーガー屋に入り（彼が二週間前に予約を勝ち取った）、フレンチフライとヴィーガンチーズバーガー、それに炭酸水を私が注文した。全部二つずつね、と洒落たカフェエプロンをつけた背の高いウエイターに付け加える。ここはメニューにもくどくどと書いてある通り、素材にこだわったヴィーガン向けのハンバーガーを売りにしているらしい。チーズさえ牛乳不使用であるというこだわりようである。
「僕、なぜかわからないんですけど、……ち、ち、ち、チーズバーガーを発音するときにものすごく詰まってしまうんです」
チーズが大好物だけれど、単語の頭についている「チ」という発音がおそろしく苦手なせいで、普通のハンバーガーを注文してしまうのだとひどく悲しそうな顔で言う。
「き、今日は佳渚さんが頼んでくれましたよね。すごくうれしかった、ありがとう」
「そんな、簡単なことですよ。これからハンバーガーショップに行くときは、私がチーズバーガー二個、って頼めばいいことでしょう。あらたまってお礼を言われるようなことではないわ」
急に照れ臭いような気持ちになって、淡白な口調になる。どうしていいのかわからなくなって、彼を盗み見た。いま彼のことを抱きしめてやりたかった。好きとか嫌いとかではなく、そうするのが一番の解決策ではないかと思ったからだ。しかしさすがに初対面であるし、ボディタッチの多い奇人と思われたら嫌なので、そうすることはできなかった。それでテーブルや回遊魚のように行き来するウエイターたちに目を遣った。
テラス席はきらきらと開放的で、陽ざしを遮る赤いパラソルの下には赤いギンガムチェックのビニルのテーブルクロスがぴったりとかけられていた。二本の炭酸水の緑色の壜はくもっていて、だれも知られることのない不幸でいっぱいに満たされているようだった。その不仕合せさを人に話したところで、理解されることは永久に不可能だ。私たちはそれぞれの壜から自分のグラスにそれをひっそりを注いだ。こうやって誰かと昼間に何をしていても、ものすごくさびしいと思った。
しばらく沈黙が続いていた。それはけっして厭な種類のものではなかったけれど、話を変えてみようと思い口を開いた。
「そういえば、さっきのお話。京平さんはどんな絵を描いているんですか？」
「ええ絵というより、オブジェというのかな……。ああでもそれは像に限らなくって、ときに映像だったり、なにもない空間だったりすることも大いにあり得ます。き、きっと、実際に見てくれた方が分かりやすいかと思います」
「へえ、じゃあ画家というよりアーティストといったほうが合っているんですか？」
「そ、そうですね。でもその言葉、僕にはなんだか大げさで、初対面の人にそう名乗るにはかなり気が引けてしまうんです。おいおい何言ってるんだこいつ、と失笑されかねないでしょ」
彼はひとしきりその特殊なアート分野の話について語った。私にはそれはアートというよりもサイエンス的な実験のように聞こえた。一度語りはじめるとどもることもなく、本当にべらべらという表現がしっくりくるほど止まらない。
「生物学と芸術を組み合わせた、バイオアートという分野があります。この前まで表参道で、何人かで展覧会をやっていたところです。僕たちがやりたいのは、目に見えないものをテーマにして実験的に作品にすることです。それは作品によって世間にバッシングされることもありますが、その人間がうじうじと持っている倫理の部分をぶち壊してみたいんです。分野で制作をしている僕たちは、現実によって、美の概念を覆したいんです。みんなに受け入れられなくても、気味が悪いと言われても、その人の記憶に強烈なイメージとして断片的に残ったり、普段忘れている感情に訴えたりすることができれば、万々歳です」
テーブルクロスのギンガムチェックの模様に沿って、蟻の子どもが規則正しくあるいていた。
「バイオアートで有名な作品を一つ紹介しましょう。フィンセント・ファン・ゴッホの切り取られた左耳を、バイオ技術を駆使することで現代に蘇生させる、ドイツのアーティストによる作品です。白い耳の形状をしたものが、モーターのついたアクリルの水槽で、実際に生きているんです。この生の細胞の元となったのは、ゴッホの玄孫や親戚から採取した遺伝子。水槽の前にはマイクが設置されていて、実際に話しかけることもできるっていう……」
「なんか、ぞっとするような気がしますね」
蟻は目下のところ、必死で彼の右手の甲によじのぼろうとしているところだった。私は蟻を見ながら感想を述べた。
「はい。その怖いという気持ちが、作品に本当の命を吹き込むんですよ。僕は見る人を心の底からおびえさせるような作品をいつか、つくりたい。つくらなくてはいけないという強迫観念のようなものがある」
彼は目をきらきらと輝かせ、べらぼうに大きな声を出した。
「なんだか京平さんって、フランケンシュタイン博士みたいね」
私のジョークに彼は少し笑い、それを見てこの人は寂しそうに笑うのだなと思った。
「お、お、親はあきらめてますよ、僕のことに関してはね。

でも長男だからという理由だけで、甘やかされているというのは、わ、わかります。み、苗字……つ筒井家を守るのはお前しかいなくて、ききき、期待していると口を酸っぱくして言ってくる。ごめんなさい、こんなどうでもいい話をして。僕の家の話は三文小説みたいにありきたりで、くだらないでしょう。田舎だから仕方がないんです」

私は三文小説のところで思わず笑ってしまった。なかなかに面白い人だ、と思った。

「佳渚さんも気づいてると思うけど、こ、この、たまに出るどもり。ど、どもりのせいで、僕はしなくてもいい苦労を山ほどしてきたと自分で思っています。ありとあらゆることを、試してみました。藁にでもすがる思いっていうんですか……と、とくに母親が気にしてしまって。ち、ちちち、ちょっとは良くなったほうなんです、これでも。でもどうしてもねえ、治らないんですよ。もう今はあきらめてこう考えることにしました。これは一種の、持ち味のようなものです、ぼ僕の」

「持ち味」

気持ちの良い風にまじって焼き立てのパンの匂いがどこからかながれてきて、私の鼻孔をやわらかくくすぐって去っていった。本当に天気のいい日だと思った。

注文していたチーズバーガーが来るまでに、ゆうに四十分は経っていた。その間に私たちは新しくペリエを追加していた。話していると喉が渇くし、食べ物のないテーブルはすこし居心地がわるかった。彼はうれしそうに目を輝かせそれを手に取った。ハンバーガーがきっちりとくるまれている紙にはGMO・free（遺伝子組み換えでない）とオレンジ色の文字で書いてあった。

私は彼の一挙一動に意識を向けてみた。マスクをいつのタイミングでどうやって外すのか、興味があったのだ。

案外普通そうに彼はマスクを顎までずらし、顔の大きさほどあるハンバーガーを片手で持つとすっと口まで持って行った。そして大豆でつくられた肉っぽい見た目の塊を、もくもくと咀嚼した。勢いよく吸いこむみたいな、独特の食べ方だ。ハンバーガーにおいてそういう食べ方をする人を私はいままで見たことがなかった。

そして彼の顔の下半分を見、そうしてあらためて全体を見た。私が想像していたよりも鼻は大きく平らに広がっていて、これまた平面的な顎へとつながっていた。随分とのっぺりとしていて、深海にいそうなユニークな人面魚を思わせる。なんというか、すべてがアンバランスだった。目から上半分は完璧な造作をしているのにマスクを取り払うと一転、そのパーツのかたち、配置、不対称さのすべてにおいて、こちらを不安定な気持ちにさせるものだった。人はこんなに顔を半分隠すだけで印象が変わるものだろうかと思わず目を見張った。

それから非常に特徴的な、あまり見たことのない口に目を引き付けられた。ほぼ楕円形の唇の内側の肉は分厚く吸盤のようで、その口腔内にはとげのようにとがった、ぎざぎざの歯が不規則に生えていた。

マスクをはずした彼は何かに似ているけれどなんだろう、爬虫類じゃない虫じゃない、と考えは逡巡し、あれじゃないこれじゃないこれは似ているけどちょっと違う、と脳内でスクリーニングした結果、中学の生物の教科書に載っていたグロテスクなヌタウナギの画像がぴたりと彼の面貌と重なった。ああこれだ、とすっきりしてやっとハンバーガーに集中することが出来た。

マスクを外した彼のアンバランスさを目の当たりにした私は、彼とデートを続けるかどうかを、ほんの一瞬だけまよった。しかし私たちをとりまいてゆったりと流れる空気や時間が割と気に入ったので、そのまま何度かデートを重ねた。

デートのたびに彼は必ず七つ入りのクリスピークリームドーナツを買ってきて、「おおお土産」という言葉とともにくれた。一人暮らしの私は、きまって五つのそれらを冷凍することになった。そういうふうにしてオリジナルグレーズドを一週間かけてひとつずつ消費していった。すべてのドーナツを食べ終えると、また彼に会う日がやってくる。ささやかで幸福なルーティンが出来た。

そしていよいよ私がドーナッツの味に飽きてきて、それを見るだけで胸やけするようになったころ、自然な流れで付き合うことになっていた。

一年記念日に水族館デートに行った帰りの道で、突然プロポーズされた。本当は水族館で言いだそうと思ったのだけれど、どうしても言えなくてこんなことになってしまった、と彼は頭をかいた。ジャケットの右ポケットから取り出されたコマドリの卵色の正方形の箱の中に、ダイヤモンドの指輪が燦然と輝いていた。それは薬指にはめると思いのほか重く、指を動かしづらかった。一粒のダイヤの周りを取り囲むようにさらに細かいメレダイヤがびっしりと結集し虹色の光を無数に生み出していた。それからは怒涛だった。長野にある彼の実家は長男が結婚するということ

第7回健友館文学賞大賞受賞!

「彼らは何を語りたかったのか」

タイ・カンボジア国境の難民村。
炸裂した砲弾で黒焦げになった数多くの死体が散乱していた。

健友館

税込 1700円
御注文はアジア文化社まで

でお祭り騒ぎの状態になったのだ。

流行遅れの型のシャネルのワンピースにそろいのジャケットを羽織った厚化粧の母親と、ひどく影のうすい父親が東京駅に私を品定めにやって来たのである。彼の父親は眼鏡をかけていて、とても無口な人だった。グレーがかった髪がくるくるしていて、彼の髪型は父親譲りなのだということがわかった。

彼の母親によって指定された有名ホテルでお茶をすることになった。私はベージュのながめのワンピースを着、肩まで伸ばした髪の毛はハーフアップにまとめることで、最大限にお嬢さんっぽさを演出した。この日のために美容室で髪の毛の色も濃いトーンに落としてもらっていた。

開口一番、その女はこう言った。

「家系図、および三等親までの離婚歴・身体的及び精神的病気（こちら既往歴を含みます）・宗教の有無について簡潔にまとめられた書類を送ってくださらないかしら？　もちろんあなたのことについても同様。結婚っていうのはこの先うちの血統にかかわっていく重要な問題ですからねえ、ねえ、あなた」

彼女は息継ぎを入れずにそうまくしたて、存在を消している自分の夫の方を見、無理やり同意を求めた。京平とはインターネットで出会ったんですって？　時代よねえ。私たちの時代じゃあ到底考えられなかったわ。どこの馬の骨かもわからないお嬢さんをもらうわけにはいかないでしょう？　不敵な笑いを浮かべた義母になる女は、とってつけたような奇妙なアクセントの東京弁でしゃべり、私は三文小説という言葉をぼんやり思い出していた。

「病気で亡くなられたならまだいいけれど、離婚しているのはダメよ。蛙の子は蛙といいますからね。肉親の離婚を経験した人って、すくなからずそのことを軽視する傾向にあるわよねえ。育った環境が自分のものさしをつくっているんだもの。そういうわけで、家族や親戚に離婚者がいる場合、無意識のうちに影響を受けているから、うちの家系にはふさわしくありません。精神的な病気やいかがわしい宗教の問題がある場合も同じです」

冷や汗が背中を伝っていくのを感じた。蛇みたいにちろちろと舌先で唇をなめながら、彼女は私をじっとり眺めまわした。私は視線を真っ向から受け止め、ホワイトニングした歯を見せつけるようにしてにっこりとほほ笑んだ。歯列矯正でもしたみたいに歯並びがいいのは生まれつきで、そのことに感謝した。相手はふん、といったように鼻から息を短く出すと何度か軽くうなずいた。

「質問があるのだけれど、あなたはどうして九州の大学なんて出たのかしら。……うん、この大学が九州全域ではよい学校であることはわかるのだけれどね」

どうやら長野に住む義母は東京以外の地方をよく思って

いないらしかった。

「東京にはたくさんいい大学があるのよ、ご存じでしょうけれど。私が親だったら東京の大学に行かせるわあ」

「母がひどく心配性で、私を東京の大学にやるのを反対したのです」

私は言葉に窮して小さな声でそう言い、そこに同席していた彼が大学の偏差値や卒業生の著名人についてひととおりプレゼンするなどと、適切なフォローを入れてくれたことで難を逃れた。

この姑になるはずの女は、私という人間の細部を調べてそのひとつひとつにけちをつけていき、それでも飽き足らずいつでもくまなく見張っているように感じた。

しかしながら、私に向けられた、どこぞの馬の骨かわからぬ女という彼女の言葉はあながち間違ってはいなかった。差別的かつ時代遅れも甚だしいけれど厭に鼻が利く女だなあ、と私は彼女の勘の良さに内心恐れおののいた。しかしそうしているだけではダメなので、彼女と正面切って戦い、なんとしてでも丸め込んで夫を勝ち取らねばならなかった。ここまでくると頭脳戦だ、と私は意気込んだ。

私はネットを参考にしつつ嘘八百の家系図を自作した。友人から見聞きしたほんわかした母娘エピソードをいくつかピックアップし情感込めて話すなどして「まったく苦労しなかったと言えばうそになるけれど、それなりにきちんと生きてきたとっても気立てのいいお嬢さん」の虚像を必死で作り上げた。そして京平さんがいかに心優しく家族思いであるか、たぐいまれで豊かな才能を持ったすばらしい長男であるかを力説し、祭りの神輿さながらに持ち上げた。

「ああ、京平さんみたいなすばらしいお子さんを持てるって、母親として幸せでしょうねえ。京平さんのお母様が心底羨ましいです」

畳みかけるように私は殺し文句を言い、その瞬間決まったと確信した。

歯の浮いたお世辞の数々にうっかり口元をほころばせてしまった女はついに私の姑となることを宣言したのだ。けっしてぼろを出してはいけない、私はこの姑を欺くことに全身全霊をかけようと決めた。そのとき私にとって結婚はただのゲームでしかなく、ただ無条件に傍にいてくれる存在を手に入れていたかったのだ。

夫の家族が帰った後、私は気になっていたことを聞いた。

「あなたって、私や私の家族のことをまったく聞いてこなかったよね。それって、どうして？　お義母様はすごく気にしていらっしゃったわ。結婚するのに知りたいとは思わないの？」

「うん。べつに言葉で知る必要はないよ。僕がバイオアートに傾倒している理由とおんなじで、言葉にして得られる情報なんて不誠実なものばかりでしょう」

まったく彼の言うとおりだ、と私は深く納得した。

「それよりも分裂して再生している細胞のほうが、ずっと親切で正直なんだよ」

それから一年が経った。あれよあれよという間に新型ウイルスが日本じゅうを席巻し、私は義両親と会う必要がほとんどなくなった。彼らは医療従事者であることもあって、そのウイルスに関しかなりシビアな見解を持っていた。そういうわけで死にかけの義祖母のお見舞いにはるばる長野へ行く必要（以前はひと月に一度夫と二人で面会しに行くという約束であった）もなくなった。ゆったりとスケジュールを組んでいたために結婚式も延期になり、はたまた毎年長野の有名な寺で開催されている法事もなくなった。

「コロナだから」というのは格好の断り文句で、最強のパワーワードだ。感染拡大防止策を遵守しているというスタンスは、私の周りに転がっているありとあらゆる面倒ごとを一掃してくれた。旅行に行けないし外食だってゆっくりできない、マスクは息苦しい、はやくこんなつまらない世界が終わればいいのにと願っている反面、このままコロナがずっと続けばいい、と心のどこかで思っている。別に病原体が世界中に蔓延してほしいというわけではもちろんなくて、不必要だったものがまた自分の生活リズムの中に取り込まれるのが非常に億劫というそれだけの理由からである。たとえば夫以外の人と会うと、楽しいこともちろんあるけれど、私は自分がすり減ってしまう。

この世界との距離感が私たち夫婦には心地よいのである。

義母は結婚するまでの間私について何かしらの難癖をちょこちょこつけていたが、入籍してしまうと急に口を閉ざした。私と夫があまりに無反応なのでつまらなくなってしまったのかもしれないし、籍を入れてしまったので仕方がないと諦めたのかもしれなかった。しかしその代わりに彼女はあたらしいフレーズを習得し、繰り返すようになっていた。

「佳渚さん。私ぜったいに男の子がいいわあ」

直接会ったり電話をしたりする度に、義母は私（と夫）に向かってそう言った。きゅうになれなれしい、甘ったれたような口調をする姑にぞっとした。九官鳥に言葉を刷り込むみたいに何度も何度も口に出しては、自分の願いをこちらによこした。彼女が欲しい「男の子」は、いったい誰が産む子どもだと思っているんだろう？　私のことを産む機械だと思っているんだろうか。ちなみにその言葉の後には、自分は三人全員男を産んだというきらびやかな武勇伝がもれなくついてくる。そのお話聞き飽きましたよお義母さん。私は義母の紫とピンクの中間みたいなどぎつい口紅の色でどうしてこのひとはぜったい、なんて言葉を不用意

に口に出せるのだろう。その図太さには舌を巻く。

しかし結婚してからというものの、セックスをする機会はほとんどなくなった。付き合っていることはこの上なく愉しく、この瞬間が永遠であればいいなどと享楽に耽っていたのに。今はただ、セックスは体力を使うしんどいものでしかなかった。夫も同意見だ、と二人の間に流れる空気から感じていた。仕事で疲れてきって家に帰ると九時か十時を過ぎている。夫が作ったご飯を食べてお風呂に入って寝る、の繰り返しであった。夫はいつもすぐそばにいて、自分の手や足や体のどこか一部が彼の清潔な皮膚に触れていると、とても心地が良かった。私はすっかりと安心しきって、孤独とは反対の世界に身をあずけて眠りに落ちることが出来た。

毎回寸分の狂いもなくやってくる生理がその月は来なかったことと、体調が芳しくないのもあって、おそるおそる妊娠検査薬を使った。そして妊娠が判明した時にはとても困惑した。子どもなんて欲しくなかった。これは何かの間違いで、だれかその事実を取り消してほしいとさえ願った。

それがお腹にいたときの私は、神経質以外の何ものでもなく、しかしそれを周りに悟られたくなくて普通の人間をよそおうのに必死だった。

まだ見たことがない自分の子どもに会いたい、と考えたことは一回もなくて、それは妊娠したからと言って簡単に変わるような気持ちでもなかった。ただ体内に異物を入れていたという感じがずっとして、自分が自分じゃなくなったみたいでショックだった。自分が動物化してしまったと思ったら、やっぱり動物が産まれてきたじゃないか。だからその暗黒の期間に迅速に終止符を打ってくれた我が子には、心から感謝している。

妊娠すると人間の女ではなく、正真正銘、動物の雌になってしまって本当にびっくりした。嗅覚が異様に発達したことでなにもかも気持ちが悪くて、世の中がこんなにもたくさんの香りであふれかえっている事実に眩暈がした。できるだけ鼻で浅く息を吸っては吐くを繰り返していた。世の中の妊婦さんはこんなに大変なのか、と同情してしまった。夫のパジャマや枕の匂い、お気に入りだった洗剤や柔軟剤の人工的な花の香り、すべてのにおいがどうしても受け付けられなかった。特に電車は最悪だった。人間の発する細胞の匂いが本当にダメなのである。細胞の匂いって何、と夫は笑ったが私だって今までその匂いを嗅いだことがなかった。でもそれは皮脂の匂いとは違っていて、なんとも形容しがたいものだった。病気や風邪をひいている人は近くにいるだけですぐにわかった。

それを産んだ私は、妊娠状態の奇妙な自分が終わって正

直ほっとしていた。

それに肩の重荷がふっとおりたというか、そういうあたらしい心境だった。すがすがしい空気を肺に取り入れたときのような、爽快な気分であった。

妊娠する前の私は私は毎晩といっていいほど夢を見ていた。そのどれもが非常に現実に即した夢（やり残した仕事の続きをやっているとか、そういう内容が多い）で、それが夢の中で起こった出来事なのかそれとも現実で起きたことなのか、区別がつかなくてしばしば途方に暮れてしまう。なぜなら夢のなかでもにおいや手触りといった感覚が存在しているのだ。朝起きるとたいてい混乱している。間違い探しの二つの絵を並べるようにして、夢と現実の出来事とをひとつずつ検証していかなければならないのだ。

そしてあの日の夜はなにか違和感があったのだ。その夜の夢は突拍子もない内容で、とても気持ちが悪かった。ひょんなことから夫がヌタウナギになってしまい、その姿のまま性交するという夢だった。ヌタウナギ化した彼は目が退化していて、やみくもに私に巻き付き、グロテスクな突起のたくさんついた口で私を吸い込もうとするのだった。夢の中で私は現実と同じ人間の女のかたちをしていた。あまりにぶっ飛んでいるので、夢であるということが夢の中で即座に分かり私は一安心した。これは夢だぞ、と自分に言いかせ、夢だからまあいいかと目をつぶることにきめた。そして体をその生き物にあずけながら、もしかするとこれは欲求不満の象徴夢なのだろうかなど厭に冷静に考えていた。ヌタウナギはぬるぬるとした半透明の白い粘液を体中のおびただしい穴から大量に放出し、なすすべもなく仰臥している私の体の中にしゅるしゅるりと入ってきた。そのの打ち回るような体の動きによって、スライムのようなものの繊維が一斉にほどけて、さらっと溶けたかと思うと私の体の穴という穴を塞いだ。水の中に沈められているように息がうまく出来なくなって苦しく、わずかにあけた目蓋から天井ばかり見つめていた。そしてヌタウナギは子宮の中を何度も行ったり来たりしたのち、いきなり自分もろとも凝固してしまった。完全に動けなくなった私はいままで経験したことのない奇妙な快感に浸っていた。意識が飛んでいきそうになって放心状態のまま、いやに弾力のある葛餅状の海の中にずぶりずぶり溺れていった。

私たちの子どもは、自分ただひとりで未来を含んだ世界をこの上なく美しく完結させることができる。なんて出来た子なんだろう、母親として誇りに思うと同時に目頭が熱くなった。脳味噌がないからきっと悩むことがない。そして私も子どもについて、あれこれと心を砕く必要がない。私は女を産むのは嫌だった。義母にいびられるかもしれないとかそういう理由ではなく、女は生きていくうえで身体的にも精神的にも痛いからだ。かといって男を産むのも想像がつかない。女である自分とまるきり違う男をすぽんと産んで、その男が女に痛みを与える介助の一端となるのは避けたいような気がした。非常に喜ばしいことに、私たちの子どもはその存在によって他者を傷つける可能性が限りなくゼロに等しい。

私が子どもを嫌いな理由は、人を傷つける残酷さ、ひとりで生きていけない、愛情を得るために嘘泣きをする自己中心的なところ。私や夫のお墓をつくらないし、つくれない。そしてそれをまもる必要も、もちろんない。

仕事に追われる夢よりも何十倍も苦痛で、自殺を考える人の気持ちが少しわかる気がする。あかんぼうが耳をつんざくように泣き叫び、私の乳房にむしゃぶりついてくる。その口が目に入り、私はあまりのグロテスクさに目を覆いたくなってしまう。ぶよぶよしたまん丸の口の中には歯ではなく、ヌタウナギについている白い無数の突起が生えていたのだ。あかんぼうはその突起のついた口で私の乳房を含み、つぶつぶで乳首をしごくようにして何度も何度も搾乳し、養分を吸い取っていった。

それは私の身体から内臓という内臓を引きずり出し、ずるずると音を立てながら飲み込んでいった。またたくまに母の顔になり夫の顔になり、そのあと義母の顔になる。ぐにゃぐにゃと形を変える。そして顔だけが大人という気持ちの悪い乳児が顔をゆがませてぎゃんぎゃん泣きわめきつづけ、騒音でじいんと耳がしびれた。はらわたをすべて失った私は、赤ん坊の首に手をかけて泣きやめさせることを思いついた。そして瀕死の生き物をふと見ると、それは私の顔をしていた。

ぜったいに私は私を産んではいけないし、私の母やそのまた母を産んではいけない。私の中の卵は私が卵であったときから存在していて、そこにはずらずらとつながったすべての生命の記憶が事細かに記録され遺伝子というかたちでプログラミングされているのだ。そう思うと鳥肌がびっしりと立った。

がばりと起きると、びっしょりと汗をかいていた。コットンのパジャマが汗で背中の皮膚に張り付いている。

薄暗い闇の中、夫がこちらに背を向けている。彼もまた、起きていたのだと私は思った。彼は私が起きたことに気づいていないようで、ベッドサイドの生き物を観察しながら、なにか夢中でノートに文字を書きつけている。それは彼がいつも作品を作るときに、アイディアを書き留めておく分厚いノートだ。

「それは妻が妊娠七週目のことだった。

誰もが予期せぬ猛烈なスピードと鮮やかさで、僕たちの

子どもは産まれた。

彼女の話によると、その子どもはまったく魚のような姿をして、赤い水風船を破り、産まれたという。にわかには信じがたいことだろう。

体からは生気というものが微塵も感じられない（妻はそれを見て「縄文遺跡から発掘されたメノウの勾玉みたいねえ」と形容した）。

アルファベットのCのかたちに湾曲した身体の側面（ちょうどCの中間地点あたり）には、ごく小さな突起がくっついている。よく見ると先端は丸みを帯び、腕のようなかたちをしている。Cの終りの方はくると丸まっていて、これは尾だと思われる。頭部には目玉のようなものがついていて、ぼんやりとした黒色をしている。視力の有無、雄雌は今のところ不明。大きさは足の小指の爪ほど。コップ越しにメジャーを当ててみたところ、一番長いところでおよそ0．9㎝。

ああ僕と妻にはこれから素晴らしい日々が待ち受けているだろう。これ以上にわくわくと心が躍ったことはない。人々を驚かせる作品が、ついにこの世に生まれたのだから。彼らはみな、僕の芸術活動について、色々と好き勝手に批評をし気持ち悪がりながらも、愉しい恐怖を求めに来るだろう」

文芸思潮新人賞　優秀賞　受賞の言葉　薛　沙耶伽

この度は優秀賞に選んでいただきましてありがとうございます。

普段は仕事をしていますが、書くことが好きで、書いているときだけ本当の自分になることができます。

このように賞をいただくと、自分は自分のままいいんだと言われたようでホッとした気持ちになります。細くながく書き続けていきたいと思います。

改めてありがとうございました。

薛　沙耶伽　せつ　さやか
1991福岡県福岡市生まれ
九州大学二十一世紀プログラム卒業
現在東京都大田区在住、会社員
第37回大阪女性文芸賞大賞
第31回舟橋聖一顕彰青年文学賞大賞受賞

コラム　新文芸ドン・キホーテ

ハードカヴァーで辻原登を、電子書籍で橘玲を

文学談義の最中に「村上春樹より先に辻原登がノーベル賞を獲る」と真顔でのたまい、よく人から失笑されていた。しかし、数年ぶりの新刊「隠し女小春」（文藝春秋）が出てまもなく、文化功労者に選ばれたのだから、ノーベル賞とはいかぬまでも、そう妄言でもなかったろう。

辻原登は硬派な純文学作品と歴史物の娯楽小説を同時に書き、受賞した大手の文学賞や褒章は文化功労者を除いても十二個にのぼる。「隠し女小春」はオリエンタル工業という実在するラブドール会社の人形と暮らす男の話で、徐々にラブドールの小春が意志を持つ展開がホラータッチである。ただ、人形との道行が近松門左衛門の世界を連想させる構造となっており、そこが文学的な奥深さも醸している。

本書を手に取り、久々にハードカヴァーに触れたと感じた。物理的な意味で。文庫本はともかく、ソフトカヴァーと電子書籍の流通と共にハードカヴァーは完全に「オワコン」と化した。それと共にハードカヴァーで作品を出してきた、中堅以上の純文学作家達の出版点数も二〇一〇年ぐらいを境に減少した気もする。

一方、キンドルにてワンクリックで購入したのは、橘玲の「バカと無知　人間、この不都合な生きもの」（新潮新書）。養老孟司が二〇〇三年に「バカの壁」（新潮新書）で切り拓いた、バカ本というジャンルである。理解不能なバカの思考回路を科学的に検証して冷笑しつつ、他人事ではない不安も読者に植えつけるのが、このジャンルが売れる所以だ。

橘玲は過去の著作で「体重と知能は遺伝する」という身も蓋もない論説を展開し、世の意識高い系から支持されていた。本書も「バカは自分がバカであることを気づいていない」や、バカと利口が熟議するとバカ側の意見に引きずられて判断を誤る等、キャッチーなフレーズのオンパレードである。日常でも役立つ豆知識であり、突き詰めてゆけば、コロナ対策にて米国や日本が中国の後手に回ったことで、昨今、囁かれるようになった「民主主義の否定」に繋がるところが、危険な香りがして読ませる。

「バカと無知」は典型的な新書で、メディアが取り上げて誰もが知るようになったら意味をなさない、いわば情報寄りの知識。電子書籍で素早く読むべき書だ。また、ハードカヴァーは好事家だけが蒐集する、葉巻の如き嗜好品化している。自分のような傍流の物書きは関心が創作よりも蒐集に移りつつあり、嗜好品の希少性が増すのは歓迎だが、古びたら意味をなさない知識ばかりが書籍の主流になるのも困りものだ。

第3回
文芸思潮 新人賞
優秀賞

未踏の創造と死と

渡部裕也

圧倒的な速さと正確さによる暴力。略奪か、それとも供給か。捉え方は自由。私はただ推進力となるのみ。それが世界中の人間、あるいは神の要求なのだから。

アトリエには油絵具に特有の臭いが充満している。鼻腔から脳に引っ張られるような不快感。無臭の道具に囲まれて仕事をする私は、何度嗅いでも慣れないこの臭いが嫌いだ。大量の油絵具が、キャンバス上で抽象的な何かに変換された後であった。何かとは死、らしい。具体的な世界を生きる私には理解できるはずもないが、臭いくらいは我慢しよう。対義の修飾を持つ世界が、相互に結び付く時代を誕生させるためなのだから。

私はゆっくりと彼の横に立ち、キャンバスに展開された抽象画を眺める。これが死、なのだろうか。もっと生々しく鮮烈で禍々しいものが渦巻いている、あるいはうごめいているような絵を想像していたが、目の前のそれはまったく違っていた。まあ興味はない。執着すべきは隣に立っている東条という男なのだ。

彼は腕を組み、キャンバスから視線を逸らさない。肩を上下させて掠れた息を何度も吐き、大きく開かれた目は閉じられる気配すらなかった。無理もないのだろうか。どうでもいい、後でわかることだ。私は彼の具体的な反応を待つことにした。

体感では五分ほど。秋の深夜、建物の一角を占めるアトリエには、二人きり。人間も臭いも絵も、状態は何ひとつ変化せず流れた時間は、もう充分と思えた。彼の整った顔も見飽きている。

「これが、死だ。まさしく」彼は小さくそうつぶやいた。その声は、大部分が息で構成されている。

随分と時間を浪費したように思えていた。もっと具体的に表現できないのか、抽象画家とやらは。私から情報を引き出してやらねばならないようだ。

「この絵は百点満点で何点かしら？　概算でいいから教えて欲しいわ」仕方なく尋ねる。

すると目の前の表情がみるみる歪んでいった。せっかくの端正な顔立ちが台無しだ。やっとこちらを向いたものの、私を睨みつけている。その画家の身体からは、止めどない熱量が感じられた。

「人間でも、それ以外の生物にも限られない。そして、幸福な冷たさと残忍な温かさをも併せ持つ。白でも黒でもない、赤や緑でも、青でも黄でもない。ただ、これが、そう」

「全然、答えになっていない」

もはや呆れるほかなかった。しかし、特段の問題はない。人工の世界では彼の漠然さも数値化され、評価できるのだから。理解できない言葉で捲し立てる彼を見るに、私はもうアトリエを出た方が良さそうだった。芸術家とは真逆の、合理的な冷静さを持つ身体は、彼から放たれる熱に耐えかねてもいる。

二人はもう向き合ってはいない。アトリエには綺麗な顔と不明な絵が対峙し、邪魔者が一人。私は言葉も思考もなく動き、嫌気がこもる部屋を出て、居心地の良い暗く冷たい廊下を歩きだした。

僕はまだ整理ができていない。キャンバスに凝縮された素晴らしい、いや、形容しがたい完璧さを有する世界、それを構築した過程について。わかるのは、その閉じた世界がまさに終結、塵も雑音もない澄み切った死であるということだけ。しかし、画家としてはそれで充分だ。僕に残された創作はもうない。そう思うと急に虚脱感に襲われる。

そう、すべては取り払われた。これまでの人生を懸けてきた抽象画の、その未来が、僕には明確に想像できる。長い時間を絵に還元してきたのに、こんなにも早く終わりはやってきた。すべての終わりだ。信じられない。もう未来など存在しないのだ。

「さて、やっと見に行けるな。不本意だけれど」

もう何も考えてはいなかった。振り向くと、夜明けが迫ってきている。彼女はもうアトリエから去ったようだ。頭はぼんやりとしており、何もかもを拒絶している。ふと気が付くと僕は夜に近づき、窓を開けていた。思考せずとも身体は勝手に動くようだ。笑っている自分に気付く。不思議な心地だ。待ちかねた、死。僕は窓から身を乗り出し、求めていた世界に落ちていった。

東条に会ってから二ヶ月。私は芸大の研究室で紅茶を飲みながら、夕方の報道番組を見ている。研究室が入っている建物の隣の棟で、彼が八階の窓から落ちて亡くなったという事件は、アトリエに残された絵画と共に大いに騒がれた。報道によると、警察は自殺であると結論付けたという。すべては計画どおり。犯人を知るのはもはや犯人のみ。私だけということだ。

「亡くなった東条くんの個展、二週間前から予定どおり開催されているよ。事件で発見された作品は素晴らしかった。間違いなく後世に残り続けるだろうなあ。彼、大学三年生とは思えないくらい注目されていたのにね。可哀そうだ。これからって時に。梅津さんも関係者なんだから、見に行ってみたらどうだい？」

「私は結構ですわ、城先生。話題の作品は事件当時にもう見ていますし、どうせ私では理解できませんもの」そう、行っても無駄。もう評価は済んでいるのだ。私はテレビを消し、コンピュータのモニタに向き直ってプログラムの修正を再開した。

春。僕の芸大生活も三年目に入った。与えられたアトリエには、世界を閉じ込めるためのキャンバスと新調した筆がすでに置いてある。自分で選んだものだ。新しい作品を描こうとするとき、僕は筆と油絵具を新しく購入して、それらは絶対に使い回さない。キャンバス上の世界はどれも独立した存在と考えているので、互いに干渉することは我慢ならないからだ。

「君の大学生活はまだ半分も残っているのか。業界人の間では、もう東条の名は知れ渡っているというのに。大学なんか辞めて、作品作りに専念した方がいいのではないかい？」城教授はそう言って優しく微笑んでいる。

「親の金で大学に行くのだから必ず卒業せよ、と父に釘を刺されているのです。そもそも僕は中学を卒業したらアトリエに籠る予定だったのに、東条家のしきたりだとか言って、父が無理矢理に大学まで行かせたのですよ。ちなみに先生、僕の名前が通っているのは国内だけで、海外ではまだまだです」

「時間の問題だよ。今年中に個展を開くそうじゃないか。日本だけでなく欧州でも開催されると聞いているよ」

「よくご存知ですね。しかし、先生も僕が大学を辞めたら困るのではありませんか？　研究対象のひとりですし。現状、脳内のチップに研究用プログラムを書き込めるのは、この大学の学生に限られているのですよね？」

「東条君のデータは確かに貴重だが、若い才能が世界に羽ばたくのを邪魔したくはないよ」

城教授は僕の所属する芸術学部ではなく、芸術工学部に籍を置いている。コンピュータプログラムを使って芸術品を評価する研究をしているらしい。そして、芸術学部の学生は、ほぼ全員が教授の研究に協力しているのだ。脳内のチップに書き込まれたデータ収集プログラムによって、僕らが芸術品を見た際の脳の状態を、リアルタイムで記録しているのだと聞いたことがある。

「大勢の学生からデータを集めているから、全体としてのデータ量は膨大だし、君のデータは少ないけれど、うちの梅津さんは優秀だからね。きっと何か考えてくれるさ」

「彼女こそ、もう世界に名を轟かせていますね。年上として悔しい限りです」

「梅津さんは手放せないなあ。コンピュータに関することは、完全に任せているから」

彼女は高校生の頃からコンピュータに強く、芸術工学の研究の傍ら情報工学の分野でも活躍している。特に人工知能に関する論文は世界に先んじており、海外の研究機関からも注目されていると聞く。

「来月には、彼女がまたプログラムを書き換えに行くから、その時はよろしく。そろそろ会議の時間なので失礼するよ」教授はそう言って去っていった。

私は迷っている。目の前の東条を殺すかどうかを。彼は有望な画家らしいが、まだ若すぎるように思える。できれば長年、第一線で活躍している芸術家をと考えていたものの、この大学の先生方に該当者はいなかった。

「梅津、パスワードを入力したぞ。次は何だったかな？」

「もう何回目？　いい加減に覚えて。あとは承認、と声に出してもらえれば完了よ」

「承認」

「お疲れ様。プログラムは無事に更新されたわ」

「指紋にパスワード、最後は声かい？　本当に面倒だな」

「仕方ないでしょう？　法律で決まっているの」

最先端技術を有する先進国では、生まれた直後、脳内にマイクロチップが埋め込まれる。脳を補助するプログラムをチップに書き込むことで、人間の生産性を高めるためだ。補助プログラムは人工知能と呼んで差し支えないものである。現代では人工知能が人間の能力を上回っている分野が多く、それを利用しない選択肢はないというわけだ。一般の人間がプログラムを利用する場合には、政府が提供する専用サイトに自分でアクセスし、必要なプログラムを選択するだけで自動的にチップに書き込まれる。しかし、研究用のプログラムは事情が違う。円滑な研究推進のため、政府から許可を受けた研究者に限って、自分で作成したプログラムを政府のサイトを経由せずに書き込み可能だ。その代わりに多段階のセキュリティが課されている。指紋、パスワード、声紋の三つだ。

「僕、このチップを使ったことがないんだよ。そんなに便利かい？」
「まだプログラムの種類が少ないし機能が限定的だから、使っている人はごく少数よ。万が一、事故が起こる不安が拭えない人もいるし。でも視力矯正用のプログラムは、東条君も将来お世話になるかも」
「プログラムで目が良くなるのか」
「目から映像が入ってくるとプログラムが起動して、映像を脳の信号として取得するの。すると人工知能が映像を隅々まで鮮明にしてくれて、また信号として脳に流し込む。こうすることで、近視でも遠視でも眼鏡なしで、周囲をはっきり見ることができるわ」
今のところ、正式にはこの程度の簡単なことしかできない。それでも、研究が進んで利用者の理解が得られれば、人間の強力な道具になるだろう。
彼は細かい説明に興味がないようで、窓の外を見ながら考え事をしているらしい。今いるアトリエは暖かくも寒くもなく、静かで、深い思考に適しているように思えた。
「いつも協力している代わりに、ひとつ教えて欲しいんだ。君は死ぬことについてどう感じる？」
「もっと具体的に」芸術家の話はいつも漠然としている。聞き返すのはもうんざりだ。
東条はこちらに正対し、怖いくらい真面目な顔で捲し立てる。
「怖い？　楽しみ？」
「痛そう？　それとも気持ちよさそう？」
「終わりだと思う？　あるいは始まり？」
「色は黒？　白？　赤？」
彼は徐々に睨むような表情に変わる。私の内側を見極めようというのだろうか。止めどない質問からは狂気すら感じる。アトリエは、急な雨の来訪を思わせる、不安定な薄暗さに包まれている気がした。
「熱い？　冷たい？」
「森？　それとも林？　草原かな？」
「油みたいにドロドロ？　水のようにサラサラ？」
「そもそも死んだことはある？」
語気が強まり、答えを急かすように近づいてきたところで、私はそれを両手で制する。迫力に押されていつの間にか少し後退っていた。芸術への執着は人格をも変えるのだろうか。研究を通じて一年ほど付き合いがあるが、穏やかであっけらかんとした印象しか持っていなかった。彼と芸術について話すのは初めてである。
「死んだことはもちろんない。印象は、はっきり言って無ね。結局のところ、脳という回路から電流が消失するだけでしょう？　それまでの過程に意味なんてないわ」
彼は一瞬だけ驚いたような表情を見せ、満面の笑みを

作った。どうやら回答がお気に召したようだ。そして、何かを思い付いたのかキャンバスの前に座り、筆を持って黙り込んでしまった。
「死、それが今度の作品のテーマなの？」
「今度も、だよ。最初に筆を取った時からずっと」そう言って目を瞑る。邪魔をするなということだろう。
私の認識は間違っていた。彼は今回の計画に適している。これほどまで芸術に、そして死の表現に拘りを持っている者は、少なくともこの芸大にはいないと思われた。きっと芸術界においても希少であろう。頭の中ではもう、今後やらなければならないこと、乗り越えなければならない課題の解決策を考え始めていた。
夏。外は耐えきれないほどの暑さだが、ここは快適だ。僕は個展の準備が進みつつあるイベントスペースにいる。開催は秋なので作品はまだひとつもない。展示全体のコンセプトや作品の配置イメージを説明し、スタッフとの各種調整を完了させたところであった。
「やあ、東条君。待たせてしまったかな」
「ちょうど終わったところです。僕の都合に合わせていただき恐縮です」
今日はこの後、城教授と脳科学の展示会に向かうのだ。行きたいと思っているのは僕だが、工学には明るくない。教授に相談したところ、直々に同行してもらえることになったのである。
「個展の用意は順調かね？」
「メインの絵がまったく浮かばなくて、困っているんです。大学に入ってから描いたすべての作品を展示するのですが、それらはもはや過去のもの。最新のイメージを形にして、それをメインに披露しようと考えています。でも頭の中にぼんやりと浮かんだ構想が、なかなか降りてきてくれなくて」
「芸術家にはよくあることだね。長く芸大に勤めていると、いろいろな学生に出会うんだ。皆、服装も性格も個性的で、それぞれが異なっているように見える。それでも共通しているのは自分の作品作りを楽しんでいること、そして自らの芸術をうまく表現できずに苦しんでいることだ」
僕たちはイベントスペースを出て、ほど近い工業大学までの道のりを歩いている。
「君はずっと死をテーマに、抽象画を描き続けているのだったね。言いぶりからするとゴールは既に見えていて、そこに近づくように自分の絵を更新している。違うかね？」
「はい、合っています。ひとつの大きな山の頂に真の形があることは、ずっと前から確信しています。僕は思考の中で一歩ずつ山を登っていて、道の途中で定期的に絵として残しているのです」

「今は何合目かな?」
「まだ二合目です」僕は思わず笑ってしまった。二十台前半にもなってまだ二合目では、生きているうちに登りきれないではないか。
「正直、焦っています。とにかく時間がない。今日、脳科学の展示会を見てみようと思ったのも、何かヒントが得られるのではないかと思ったからです」
そう、考えれば考えるほど真の形が遠ざかっていくようで、置いてきぼりにされているようで、苦しくなる。どうにかして追いつこうともがいている。しかし、走っても全然前に進まない。まるで夢の中にいるようだった。
大した話もできないまま展示会場に足を踏み入れる。そこは思っていたよりも狭く、展示物は大小合わせて三十といったところ。教授はひとつひとつ、僕でも理解できる言葉で説明してくれた。
「脳内のマイクロチップを使った技術が多いですね」
「まだまだ発展途上で応用範囲も広いからね。人間に直接作用するからメディアとしても扱いやすいようで注目度も高い」教授は少し得意げだ。
「死んでみる、ということはできませんか?」思いつきで僕は聞いてみる。
「なるほど、君の考えはよくわかる。しかし、現状では無理だと思うなあ。チップは脳内の信号を取得して、プログラムで処理し、また脳内に信号として流すだけだからね。人間が死亡して、信号が消失した状態を再現するのは困難だ」
山を駆け上がるには、真の形を自分の経験で確認するのが最短だ。そういう意味では僕は死にたがっている。しかし、僕は死を表現し、世界中の生きている人々に伝えたいのだ。
「それとね東条君、倫理的な問題もある。チップを使って死を体験できるプログラムを研究するにしても、その研究内容を政府に申請して承認を得ないと、プログラムをチップに書き込んではいけないんだ。そう法律で定められている。死亡リスクのある研究は当然、承認されない」
倫理か。そんな無意味なもの切り捨ててしまえばいい。芸術による表現を邪魔するのは、いつも公共の福祉という名の倫理だ。
「一度、うちの梅津さんに相談してみてはどうかね?チップを使わないでも、疑似的な死の体験くらいはできるのかもしれない」
「ご助言、ありがとうございます」少しばかり光が見えた気がした。

私がいる会議室には、城教授を含めて八人の人間が集っていた。政府の官僚が二人、芸術家が四人だ。芸術家はそれぞれ彫刻、絵画、映像、音楽の分野で、国内だけでなく海外でも名の知られた実力者である。
「芸術家の先生方、この新しい研究を承認いただけますでしょうか? 必ずや、芸術界の発展に寄与できると自負しております。どうかよろしくお願い致します」私は頭を下げる。頭は重力に逆らっていたものの、強い意志で押し付けた。
「梅津さん、残念ですが認められませんな」最年長の彫刻家だ。「研究自体は理解したよ。一般人にとっては倫理的にも問題がないように見える。しかしね、僕たち芸術家にとっては、モラルを欠いていると言わざるを得ないなあ」
「人工知能が人間を超えるだとか言われているけれど、芸術の分野では人間だけに備わった感性が重要だからねえ。モラル意識が低くて成果も見込めない研究は、ちょっと推せないよ。そう何回も持ってこられても結論は変わらないと思うし、お忙しい先生方のご迷惑になってしまうだけではないかな」と音楽家も続いた。
他の芸術家も頷いている。官僚達は気絶したかの如く微動だにせず、発言する気配もない。私と教授以外の意見は一致しているようだ。この研究について承認会議を設定したのはこれで三回目。もう反論する気力も残っていない。沈黙がしばらく続いたが、官僚の一人が何かを言ってその場を締め、私たち以外の皆が会議室から出て行った。
「梅津さん、可能な限り根回しをしておいたのだが、申し訳ない」教授は額に手を当て、疲れ切った顔で言う。「彼らの頑固さには敵わないな。今回はさすがに呆れてしまったよ。自分たちが築き上げてきた芸術が否定される、彼らはそう考えているらしい。過去ではなくてもっと先のことに目を向けて欲しいものだよ」
「この研究はいったん塩漬けにしますわ。芸術家たちがモラルという名の保身に走っているうちは、承認が下りることはないでしょうから」
彼らは芸術の未来など微塵も考えていない。楽しみをいつまでも独占しようと必死なのだ。鉄でできた私の心もふつふつと沸き立っているのを感じる。鉄の沸点は約三千度。それだけの怒りが蓄積されていた。
あらゆる分野で人工知能の研究が進むなか、芸術だけが遅れを取っているのは知っていた。だからこそ、芸術工学という道を選んだというのに。内情は歳を取った子供が駄々をこねているだけであったのだ。私が生きているうち

広告承ります
文芸思潮への広告ご希望は広告部まで御連絡ください。　1／4四千円
☎〇三・五七〇六・七八四七

に芸術界は変わるのだろうか。はたして私はそれを待てるだろうか。とっくに結論は出ていた。やはり計画を進めるしかなさそうだ。これは私欲ではない。芸術界の進歩を加速させるための、銀の弾丸となり得るのだ。

僕の前には、共に絵画の世界に足を踏み入れ、芸大での生活を過ごした友人が横たわっている。高校の美術部で出会い、油絵と水彩画で分野が違っていたものの、切磋琢磨して実力を磨いてきたのだ。友人であることを差し引いても才能溢れる画家であり、大学に入ってからは国内での知名度を高めつつあった。しかし、彼が筆を取り、鮮やかな風景画を描くことはもうない。彼には化粧が施され、三週間前に会った時とは違うとても綺麗な顔をしていた。

この数ヶ月、友人は新しい絵が描けないと悩んでいたらしい。筆を握らせると夢中で描き続けていた彼がである。なぜ気づいてやれなかったのだろう。生気を失って痩せこけた彼の顔を見たとき、どうしてもっと話を聞いてやらなかったのだ。精神的に病んでいるのは明らかであったのに、僕はそのとき自分の芸術を優先してしまった。新しい絵の構想を組み立てようと必死だったのだ。

「名が広まるにつれて、期待に応えなければと。その気持ちが大きくなりすぎて押し潰されてしまったのだろう」城教授は僕の肩に手を置いて言う。

悲しみはもう目からこぼれ落ちて消えていた。明日は我が身かもしれない。芸術の世界に身を置き、成功を収めるということは、そういうことなのだ。芸大に入ってから思うように作品を生み出せないと嘆く者は多い。結果として行方不明になったり、友人のように自ら命を絶つ者も少なくないのだ。これからも同様の末路を辿る学友は現れるだろう。しかし、その都度立ち止まっているわけにはいかない。

「僕、大学に戻ります。描かないと」教授を残し、僕は静かに友人のもとを去った。

アトリエに戻った頃には、時刻は深夜二時をまわっていた。構内に入ってからアトリエまで、誰にも会うことはなかった。頭をかき回すような激しい思考に集中していたので、気付かなかっただけかもしれない。窓が少なく狭いこの部屋は、自分で吐き出した重たい空気が滞留し、耳が痛くなるほどの静寂と共に僕を内側へと押し込む。胃は不快感で吐き気を催していた。握った筆はいつもより弱々しく、自らを外に押し返すために使えるとは思えなかった。筆が手から離れる。油絵具が染み込んだ筆先が床に叩きつけられ、想像どおり単純に潰れた。

「描かないと」

「もっと、もっと描かないと」

「時間はない。山頂はまだ遠いんだ」

「描き切ってやる。生きているうちに」

「這いつくばってでも、この世界を表現してやる」

いくら自分を鼓舞しても、手が筆を掴むことはなかった。それどころか、涙を吸って重くなった身体はその場に崩れ落ち、うつ伏せになってしまった。ひんやりとした床が今は心地良い。僕はそのままゆっくりと深い眠りに落ちていった。

私は研究室に専用の居室を持っている。別に特別待遇というわけではない。城研究室の学生居室が定員を超過しているので、物置として使われていた隣室に、進んでデスクを構えたのだった。コンピュータ一台とディスプレイ三枚が置けるほどの、ゆったりとしたスペースがある。

「承認」もはやパスワード入力と指紋認証も手慣れたものだ。

「終わったわ。それで相談って何かしら？」この質問の矛先は東条である。

「僕を死なせてもらえないかな？　一回きりでいいから」

「勝手に死ねばいいじゃないの。もっと具体的に説明して」

「僕の頭に組み込まれたチップを使って、死ぬ瞬間を体験させてほしい。もちろん、最後は生き返らせてくれ。他の技術があるのであれば、それを使ってもらってもいい。新しい作品の構想が上手く整理できなくて、何かヒントが欲しいんだ」

「芸術家って意外と単純な思考回路なのね。それなら、仮想現実の中でビルから飛び降りてみるのはどうかしら？仮想の街を歩きまわるゲームなんて昔からありふれているし、最近は軽くて小さいゴーグルとイヤホンがあれば、現実に近い体験ができるわ。ゲーム中に気絶する人もいるくらい。歩くには専用のコントローラが必要だけれど、一式は簡単に手に入る。他の研究室から借りてくればすぐにでも試せるわ。ただし、ゲームはあなたが買いなさいよ」

「飛び降りたらどうなる？」

「さあ？　地面にぶつかる瞬間にゲームオーバー画面でも表示されるのでは？　少なくとも本当に死ぬことはないはずよ」

反応は微妙だったが、彼はすぐにゲームを購入してきた。私は知り合いの研究室から一式を借用してきて、ゴーグルにゲームソフトを書き込んだ。

「現実と変わらないじゃないか。想像以上だ」彼はゴーグルとイヤホンを身に着け、手にはコントローラを持ってはしゃいでいる。傍から見ると阿呆に映るのは、どうにか改善できないのだろうか。

「終わったら声をかけて」私は研究報告のための資料を作成し始めた。

十分ほど経過して資料も出来上がったのだが、東条は阿呆な見た目のままゲームの中にいるようだ。

「早く死んで」
「もう、三回死んだよ」そう言ってやっと装備を外す。少しだけ表情が明るくなったように見えた。
「最初の一回はよかった。地面に到達する瞬間までゲームオーバ画面が出ないものだから、心臓が飛び出るかと思ったよ。二回目以降は駄目だね。飛び降りても死なないことに慣れてしまう」早口で話す彼は少し興奮しているようであった。研究室を訪れた際の沈んだ表情とは打って変わって、笑顔で話しているところから、収穫はあったように見える。私も貴重なデータを得ることができた。
「せっかく脳にチップを埋め込んだのに、役に立たないな。ゲーム機にすら勝てないようでは」その言葉に私は苛立ちを覚えた。
「一般に広まっていないだけで、マイクロチップを使った研究はあなたの想像以上に進んでいるのよ。定型的な動きであれば、チップから脳に信号を送って身体を操作することだってできるわ。ピアノを碌に触ったことのないあなたにも、ベートーヴェンの月光を弾かせられるくらいにはね。あなたが女の子を見た時の映像と、それを評価する脳の状態をチップで記録していけば、好みの顔を画像化する人工知能を作ることもできる。好みの顔を目にした時の脳の状態は、医学的に分析が済んでいるから」
「凄さは十分に伝わったよ。申し訳ないけど、僕はアトリエに戻って今の体験を絵にしなければいけないから」そう言って彼は逃げるように部屋を出て行った。
いけない。情報を漏らしすぎた。先日の会議で蓄積した怒りがまだ残っているのか、いつもより感情の起伏が大きい。彼で実験するまでは感情を抑制しておかなければ。準備は計画どおりに完了し、あとは実行に移すだけなのだから。
気持ちを落ち着かせるため、私は紅茶を淹れることにした。カップを用意し、そこにティーバッグを入れてからお湯を沸かす。沸騰するまでの時間は、やかんを熱している青白い炎をじっと見つめて頭を空っぽにする。お湯を注いで紅茶の成分が抽出されるまでの間は、カップの中が褐色に染まっていく様を眺めて心を静めるのだ。小学生の頃に覚えた方法である。
私は感情の変化に乏しく、怒りを顔に出すことのない子供だった。孤独を苦にしない性格であるため、ひとりで本を読んでいる時間が長かったように思う。偏見かもしれないが、私のような子供はいじめの対象となってしまうのだ。表情から感情が読み取れない、それは相手を理解できないということ。理解できないクラスメイトには恐怖を覚えるのであろう。
そんな私でもいじめが長く続くと微かな不快感が蓄積し、急騰してしまうことがあった。いじめっ子を怒鳴るわけでもなく、暴力に打って出るわけでもない。いじめっ子の大好きだった絵を、ひたすらに真似て描いた。それが図工の授業の作品であろうと、家で描いてきて友達に見せびらかしているものであろうと。ただひたすらに同じ絵を、いじめっ子より評価されるよう描き続けた。特に上手かったわけではない。いじめっ子が下手だったのである。自分の絵が褒められなくなった彼は、絵に対する興味を徐々に失い、ついには笑顔までなくしてしまったのだった。
私の静かな復讐は結局のところ親に気付かれてしまい、酷く叱られたのを覚えている。それ以来、私は絵を描いていない。もともと興味があったわけでもないし、仕返しの道具としか考えていなかった。この時、蓄積された感情を制御するために祖母から教わったのが紅茶を淹れる方法だ。胸の中に溜まった怒りが排出され、紅茶を飲み終えた頃には心が空になっている。感情を研究にぶつけられている現在、この方法を使うことは少ない。それでも今は頼らざるを得なかった。
秋。僕のアトリエからは、隅々まで色づいたイチョウを楽しめる。それでも、窓から離れてしまえば、見えるのは季節によらない青空だけ。空調で管理された室内の温度や湿度もいつもどおりであった。
ゲームで死に近づく体験をした後、僕の中で曖昧に浮かんでいた構想が徐々に降りてきて、明確な輪郭をあらわした。それは過去の作品からは想像できないほどに大きく飛躍していた。
「これは三合目を通り越してしまったかもしれないなあ」キャンバスに油絵具をのせながら、小さくつぶやく。
一枚の窓ガラスより少し狭いくらいのキャンバスに、九割八分ほどの世界が展開されつつあった。ここまでに二週間は要しただろうか。そして、隣にはこれまた新しいキャンバス、筆、油絵具の一式が用意してある。昨日、購入したものだ。今の作品を描いているなかで、さらに一歩先の構想を思いついたのだ。個展の開催時期が迫ってきてはいたが、なんとか二枚とも完成させようと考えていた。あまりに順調過ぎて怖いくらいである。
「楽しそうね。死を表現している人の顔とは思えないわ」
驚いてドアの方を向くと、梅津が微笑みながら立っている。集中するあまりまったく気付いていなかった。
「いつからそこに？」
「ついさっき。三十秒前かしら」
「絵に夢中でね、気が付かなかった。コーヒーでも淹れよう」
「気にしないで。作品、もうすぐ完成なんでしょう？　自分で淹れるから大丈夫。窓の外でも見ながら待っているわ」
「そうか。悪いね」

僕はまたキャンバス上の世界に戻った。描くべき世界が見えている限り、それを白い布に展開し終わらない限り、僕の集中力は持続した。視界はもはや筆先にしかなく、部屋にいるはずの彼女の音も耳に入ってはこなかった。

「完成したよ。今回は君の助力が大きかった。ありがとう」

「あら、私は仮想現実の装置を借りてきただけよ。ゲームの中で勝手に死んだのも、その体験を絵にしたのもあなた」彼女は窓際から移動し、真新しい筆を手に取って眺めている。

「ごめんなさい。目新しい道具がたくさんあるものだから、いろいろ見たり触ったりしてしまったわ」

「僕は気にしないから大丈夫。それより何の用だい？」

「今日は研究用プログラムを書き換える予定だったでしょう？」

それで彼女はコンピュータを持ってきていたのか。絵に没頭するあまり、忘れてしまっていた。

「もう一枚、新しいキャンバスがあるけれど、まだ描くつもりなの？」

「そう。二枚とも次の個展に出したいんだ。日程は厳しいが、明日はゆっくり休んで明後日の夜にでも描き始めようと思っている」

「忙しいのね。さあ、書き換えを始めましょう」彼女はそう言ってコンピュータを開く。三十秒ほど待っていると準備が整ったようだ。僕はコンピュータで指紋認証したあと、パスワードを入力した。

「で、どうするんだっけ？」

「承認って言ってね」

「承認」

彼女はコンピュータを閉じる。作業は終わったようだ。いつもながら手際がいい。僕は昼食を何にしようかと考えていた。

「そういえば、チップを使った仮想現実の研究をしている人がいて、話を聞いてきたわ。コンピュータ上での実験はすでに成功しているらしいから、近いうちに実現するかもね。ゴーグルやらコントローラやらの不自然な装置は不要になるそうで、没入感が段違いらしいわよ」

「本当かい？　そのプログラムをもらってきて、僕で試してくれないか？」

「残念ながら無理。海外の大学で行われている研究だから、法規制でプログラムの入手自体が困難ね。仮に手に入ったとしても、チップに書き込むには政府から研究承認を得なければいけないの。まあ、法律で手続きが決められているだけで、未承認の研究用プログラムでも実は書き込めるんだけどね」

「そうなのか？」

「もちろん誰でもというわけではないわ。教授や私のように別の研究でプログラムの書き込みを承認されていれば、政府から書き込み用のコンピュータが支給されるの。今使っていたこれがそう。あまり出来の良いコンピュータではないから、未承認のプログラムを用意して書き込もうとしても、特に怒られたりしないみたい」

「じゃあ頼むよ。僕はもっと先に進みたいんだ」

「駄目。プログラムはあくまで研究用だから、あなたに万が一の事があるかもしれない。その時にチップの中身を調べられたら、私の研究人生が終わるどころか犯罪者よ。あなたの指紋、パスワード、声紋がないとプログラムを消去することもできないんだから。勝手なことばかり言ってないで、少しは自分で考えなさいよ。芸術家でしょう？」

僕はしばらく懇願したものの、しっかり論破されてしまった。仕方ない。

「昼食でも一緒にどう？」そう言って彼女は残ったコーヒーを飲み干した。

僕らはアトリエを出て、昼でも薄暗い廊下を歩きだす。作品を完成させた達成感で、僕は弾むボールのような足取りだ。頭の中では食堂で親子丼を食べようなどと、どうでも良いことを考えていた。

私の脳と心臓は平常運転。特に危険を冒すわけではないので、当然といえばそうだ。歩いている真っ暗な廊下は一昨日に通ったばかり。日曜の夜であるためか、構内に人は少ないようで、研究室を出てから誰にも会っていない。アトリエのドアを開くと、東条がこちらを向いて驚く。待ち合わせをしていないからだ。何も言わず、片手を挙げるだけの挨拶を済ませる。そして私は、まっさらなキャンバスの前に置かれた小さな椅子に座った。

「そこは僕の特等席なんだけどな」

彼はそう口にしつつも二人分のコーヒーを淹れ、歓迎の意を示してくれた。何も話さない私を見て、不思議そうに首を傾げている。部屋の片隅にある椅子を持ってきて、彼は少し離れた位置に腰を下ろした。沈黙を保ったまま熱いコーヒーを飲み終えるのに、たっぷり五分ほど。窓の外は廊下よりもさらに暗く、先日見た東条の絵を連想させた。

私はキャンバスに正対する。筆や油絵具など、必要な道具は周囲に揃っていた。それはもちろん、これから彼が新作を描く予定であったからだ。おもむろに筆を掴み、視界にキャンバスと筆が入るよう姿勢を正す。数秒のタイムラグの後、筆を持った腕が静かに動き出す。私の腕に操られた筆は、油絵具を取り、キャンバスに塗るという一連の工程を繰り返した。こちらを凝視する東条の姿を視界の端で捉える。彼は私を制止しようと片手を持ち上げたが、すぐにその手を下ろして腕組みの姿勢をとった。自由に描かせてやろうという意思表示だろう。キャンバスを含め、新し

い道具はたくさんあるのだから。

キャンバスに展開する絵の構想はすでに固まっているため、筆は円滑に、ただひたすら色で布を支配していった。色の選択意図や配置について、私は理解できないし興味すらない。それでも会話のない静かなアトリエでは、徐々に出来上がっていく抽象画を見つめているほかなかった。東条は最初こそ無表情でこちらを眺めていたが、やはり絵が気になるのか、立ち上がって私の後ろからキャンバスを見ているようであった。

二時間ほど経過しただろうか。ようやく腕が下ろされた。作品が完成したらしい。休憩もなく筆を動かし続けたことで、腕はもう上がらない状態になっていた。秋夜であるというのに、顔や背中には汗が流れていて気持ちが悪い。

「この世界の構想を考え、描いたのは、私ではないわ。人工知能よ。私はプログラムに身体を貸しただけ」

これがとどめのひと言。やるべきことはすべて成し遂げた。後は結果が伴うのを待つのみ。私は解放された上半身の力を抜き、大きく深呼吸をした。

僕は、梅津が淡々と描いていく絵を彼女の後ろに立って見つめている。胸の前で組んだ腕がじんわりと熱を持ち、絵がキャンバスに広がっていくにつれて、その熱が体中に伝達されていくのが感じられた。熱源は自分の中心にある核、それも最も大切な表現を司る部位。

彼女は芸術に造詣が深かっただろうか。抽象画を描いた経験があったのだろうか。筆の動きは多少荒いものの、すらすらと止まることなく色をのせていく。完成形がもう見えているのだろう。おかしい。彼女は芸術工学の分野では一流だが、芸術作品を創り上げることに関しては、素人であるはずだ。

自分が置かれた不可思議な状況に困惑しつつも、僕はキャンバスから目を離すことができなかった。こんな事が起こっていいはずがない。七割ほど彩られたキャンバスには、僕の核が強く揺さぶられる世界が展開されているのだ。

「この世界の構想を考え、描いたのは、私ではないわ。人工知能よ。私はプログラムに身体を貸しただけ」

彼女が筆を動かし始めてから二時間。たったの二時間。キャンバスに展開された世界は、僕が長年追い求めていた山の頂そのものであった。馬鹿な。これを描いたのがプログラムだというのか。信じられない。

全身を包む熱の温度は上昇し、揺れ動く核は細胞の波を作る。波は呼吸を荒立て、肩を上下に大きく揺らし、息からは水分を奪う。それを抑制しようとする意志は、身体を硬直させようと眼球が飛び出さんばかりに目を見開き、筋肉に力を籠める。僕は表現の核と意思が拮抗した状態で、なんとか正気を保っていた。

「これが、死だ。まさしく」小さな声が漏れる。

「この絵は百点満点で何点かしら？　概算でいいから教えて欲しいわ」

彼女は何を言っているのだろうか。点数？　概算？　そんな無意味なものについて質問しているらしい。表現者である僕を馬鹿にしているのか。そんな落ち着いた声で評価を求めるな。

「人間でも、それ以外の生物にも限られない。そして、幸福な冷たさと残忍な温かさをも併せ持つ。白でも黒でもない、赤でも緑でも、青でも黄でもない。ただ、これが、そう」

大変な嫌悪感、嫉妬、そして消失感。感情が複雑に入り交じるその渦中にあっても、僕は彼女の創り出した世界を称えずにはいられなかった。それは僕の核から放たれた言葉であり、死を表現してきた芸術家としての純粋なものであった。

その時、均衡が破れて核が壊れる音がした。想像していたよりも静かで、がらりと崩れるような、儚く優しい音であった。

東条がアトリエから飛び降りた事件から、半年が過ぎようとしている。私の描いた抽象画は彼の最後の作品として個展で公開され、国内のみならず海外の芸術家からも高い評価を受けているらしい。彼が絵を見たときの脳の状態も、チップで取得したデータを使って解析済みだ。結論だけを述べると、芸術工学としての点数はこれまでに評価したどの芸術品よりも高かった。圧倒的だったと言っても過言ではない。彼の目標としていた表現が、私のおかげでいち早く世界に供給されたのだ。嬉しい限りである。

私は主が居なくなったアトリエでひとり椅子に腰かけ、ゆっくりと紅茶を淹れていた。昼下がりなので部屋はまだ明るさを残していたが、窓の外は雨であった。目に映る範囲で動いているのは大量の雨粒だけ。それらひとつひとつが私の心を掻き乱そうとする。それでも、茶葉から染み出した褐色によって、感情は平静を保っていた。私は淹れ終わった紅茶をひとくち飲み、温かい息を吐く。そして静かに目を閉じ、自分で抽象画を描いた日のことを思い返した。

開発したプログラムは、私のマイクロチップの中で正常に動作してくれた。真っ白なキャンバスと新品の筆が視界に映っていること、それがプログラムの起動条件。プログラムは人工知能であり、死をテーマにした抽象画を生成する。後はその抽象画がキャンバスに再現されるよう、脳に信号を流して身体を操作するだけ。

抽象画を生み出す人工知能の開発も容易であった。城教授と共に研究を推進している私は、芸大生が見た抽象画の画像と、抽象画を評価したときの脳の状態をデータとして

収集できていたからだ。それも大量に。さらに、自殺を図った学生からは、死ぬ瞬間の視覚画像と脳の状態という貴重なデータも得られていた。そこには、仮想現実を使って死を体験した東条のデータも含まれている。後は大量のデータを人工知能に流し込み、生成した抽象画を評価したときの脳の状態が、死ぬ瞬間のそれと似るように学習させるだけであった。以前に東条に説明した、好みの顔を画像化する人工知能と同じ原理である。

抽象画を描く人工知能はかなり前に完成しており、あらかじめ私自身のチップに書き込んであった。東条が仮想現実で死を体験したその日である。彼の目の前で書き込み作業を行うのは、実にスリリングであった。

新聞やテレビの報道では、彼の死が自殺だったという結論は覆されていない。当然だろう。私は彼に触れてもいないし、彼が飛び降りた時にはその場にいなかったのだ。筆には指紋がついていただろうが、事前にアトリエの様々な道具に触れておいたので、絵の作者が私であることも気付かれないはずだ。もちろん、私のマイクロチップからはすでにプログラムを消去してある。証拠はもう何も残っていないというわけだ。

つまり、今回の実験は成功だったといえる。狙いは芸術家から創造性を奪うことであった。長年に渡って同じテーマで抽象画を描き続けてきた芸術家の前で、ずぶの素人が人工知能を使ってその完成形を描く。芸術家が時間をかけて苦悩の末に生み出す創造物は、人工知能が数秒で構築したそれに遠く及ばないことを見せつけられるのだ。そして、それは死というテーマ、ひいては抽象画の分野に限られないことには、すぐに思い至ったであろう。必要なデータさえ揃ってしまえば、どの芸術にも応用可能なのだから。彼が将来の創造物を失ったことに絶望し、自ら死を選んだことは想像に難くない。

創造性という楽しみがあるからこそ、芸術家は作るのだ。ダンサーも漫画家も、研究者であっても本質的には同じである。一から作品を生み出せない者でさえ、二次創作として少しでも創造しようとする。そんな人間が創造性を奪われる恐怖、絶望感は計り知れない。

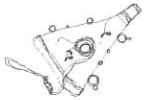
私は両手で頬を叩き、気を引き締めた。最終的な目標は、芸術界に居座る重鎮たちを東条と同じ方法で消し去り、人工知能と芸術とが交わる研究、それが許される状況を作り上げることなのだ。そこには、抽象画を生成した人工知能に関する研究も含まれている。創造という楽しみを長らく占有してきた芸術家たちは、自分が却下した研究の成果物によって、自ら死を選ぶのである。

何度でも言おう。これは私欲ではない。芸術界の進歩を加速させるための、銀の弾丸なのだ。

文芸思潮新人賞 優秀賞 受賞の言葉　渡部裕也

錚々たる審査員の方々に応募作を読んで頂けただけでなく、優秀賞を賜ることができ、大変光栄に思っております。小説執筆の初心者である私の応募作を、栄誉ある賞に選んでいただけるとは思っておらず、まさに驚喜といったところでしょうか。

今後は自らの伝えたい主張や感情をより鮮烈に表現できるよう、気を引き締めて精進して参ります。ありがとうございました。



渡部裕也

わたなべ　ゆうや

1988 福島県生まれ

茨城大学大学院にて理工学研究科を修了　専門は知能システム工学

国内メーカーでソフトウェア技術者として製品開発に励むかたわら、2022 年より小説執筆への挑戦を始める

五十嵐勉
アジア文化社　1700円

五十嵐勉の核開発を舞台にした戯曲 DVD あり
アジア文化社　1000円

プリンセス・パラドックス

倫子

一

目が覚めた。少しずつはっきりとしてくる部屋の調度品の輪郭をぼうっと眺めていたら、外から明かりが差し込んでいないことに気付いた。雨でも降っているのだろうか、と思いカーテンを薄く開いて外を見た。雨などは降っていなかった。頭上に広がるのは、真っ暗闇であった。月も星も雲によって姿を隠されていた。初めて、こんなにも長い間寝て時間を過ごしていたことに気付いた。特に、長い夢を見たわけでもないため、時間が経ったようにも思えなかった。

いつものような起床時の、脳がかき回されているような気だるさは感じられなかった。体は重く、動かすことに億劫さを感じたが、頭は通常通りに、思考することを許してくれた。部屋の電気のスイッチを入れ、テレビをつける。チャンネルをくるくると回す。いつもの夜に見ている報道番組の放送によって、時間を把握した。そのまま、リモコンを置く。ソファに投げ出した左足のストッキングにひとすじの伝線を見つけたが、すぐに視線をテレビに移し、新しい科学技術の発見について大仰な口ぶりで語るニュースキャスターを暫く見つめた。腹の音が鳴る。台所まで歩き、お菓子やら、インスタント製品やらが入った戸棚を開ける。インスタントの簡便な調理さえ面倒臭い。大袋に入ったクッキーを取り出し、その足で冷蔵庫まで向かい、ペットボトルに入った水を取り出す。また、ソファに戻る。クッキーの大袋を開け、貪るように食べる。最初に一口飲んだ

きり、水には全く手をつけない。クッキーの袋は空になる。一つの欲望が満たされると、一つの理性が戻ってきた。

恋人の彼女と別れたのだった。長い、長い眠りの前に。

悲愴や、苦痛はなかった。ひどく動かない心を、別に滑稽だとも冷徹だとも感じなかった。貪り、貪られたりした熱情や、互いに交わし合った愛を含んだ言葉などは嘘ではない。恋人との日々は、なかったことにはならない。ただ、その思い出にはどこか必ず空隙があり、完成体として思い出されるものはなかった。

普段は丁寧に折りたたみ、結んで捨てるクッキーの袋をぞんざいに潰し、ごみ箱にねじ込む。手についたクッキーの細かい欠片を軽く洗面所で洗い流す。丸一日経過した化粧が、逆に顔を粗野に見せていた。そのまま戻り、ソファにだらしなく横になる。一晩を起きて明かそうか、と考えたが、無理に寝ることにした。夜は怖い。たった今も地球の半分は明るいのだと思っても、壁一枚隔てて人がいるのだと思っても、一人だけ無造作に闇に放り出されたような感覚になる。昔から、夜更かしはほとんどしたことがなかった。睡眠は体に強いれば、どうにか出来るものだ。

目を瞑り、ひと眠りをする前に、別れた恋人と最後に愛情を交わしたときのことを思い出した。それ以前にしていた、新しい遊びを試すようなやり方ではなく、ひっそりと愛した。同時に、目の前に複数の知り合いの男の顔が入れ替わり立ち替わり現れた。その男達の顔を揉み消して、意識を失った。

恋人だった彼女の顔、体は思い出せる。あれだけ近くで眺めて、触ったのだから当然だ。彼女は美しかった。そして、今でも美しいのだと推測できる。とある、顔も名前も良く知らない、男の、女となった今でも。むしろ、一人の相手をこなした分、女らしさには拍車がかかっているだろう。艶かしい彼女の体を、誰かが貪っている。舐め回し、嗅ぎ、触れている。かつて自分も貪った。彼女を抱いている男のことは、想像もつかない。どんな男なのだろうか。体は、顔は、声は、考えは、どんなものを持っているのだろう。どのように彼女を抱くのだろうか。考えは巡るが、それは微塵も嫉妬を伴っていなかった。まるで他人の色事を、キネマで見ているようだ。淫らだと感じても、凝視することが出来る。

今の心の中の彼女は、絵空事だ。

二

彼女と別れて三年が経ったが、まっとうに生きていた。食べ、働き、くだらない遊びに時間を使う。その間に知り合い、付き合いをはじめた彼とは一年半が経過していた。文句の言うことは許されない程度に文化的生活の条件は満

たされていた。

ある日彼にホットミルクを作ってほしい、と言われた。台所に立つ。鍋に白い液体を満たし、火にかける。熱されていく一様に張った白い面を眺める。そして、思い出された。

彼女は巾着袋の中身をぶちまけた。それらは、ジグソーパズルのピースだった。彩りはなく、白で出来ていた。これが全てよ、と彼女は言った。ミルクパズルって言うの。絵の描かれていないパズルのことよ。絵がないのに何が楽しいのって？　そうね……、完成させても満たされることのない感覚かしら。具体性のないもののために時を浪費することは、一番の遊びでしょう。恋愛もまた然りね。特段、可笑しなことじゃないわ。誰でもやっていることよ。

弾ける泡を立てるミルクを確認し、火を止めた。熱く、白いミルクを白いマグカップに注ぐ。白と白。空を踊る熱い液体と、ちょうどふさわしい重量の音を伴って割れる固体。白い破片で割れる体は、赤を流して抵抗する。熱い赤に、同じくらいに熱い白が合流する。主張の強い赤は、染まりやすい白と混ざり、色に勾配が生まれる。マグカップをぶん投げたいと思ったが、欲動は頭の中の舞台でのみ暴れる。危険なことなど、平和が当たり前な世界で生きていれば試せない。普通の人は物語の中でのみ殺人事件を楽しみ、射的場でのみ銃を撃つ。

白いマグカップを彼の前に置いた。有難う、と言い、彼は湯気の立つミルクに何度か軽く息を吹きかける。表面に少し口を浸すようにして飲む。繰り返す。片手は本のページを捲りながら、片手には把手を握る。ゆっくりと飲み干されるミルクは味わわれてなどいない。これは、単純な儀式である。液体がすべてなくなったときが、合図だ。牛乳を温めろと言われるときの、お定まりの流れだ。恋人は、この流れに絶対に逆らわない。流されそうな見かけとは違い、意思薄弱といった言葉とは正反対である。

彼が本を閉じた。儀式用のマグカップの中身を一瞥すると、満たされていた液体は消えていた。次は、何も言わない。そのまま寝床へ行き、契る。行為は、決して激しくない。恋人とは、とても静かにことを行う。かといって、空虚な心持にはさせない丁寧なやり方だから、ちょうどいい。心地良い。何より、一対一の等価な愛情が、気持ちいい。昔の恋人では決して得られなかった。

久しぶりね、ああ彼？　恋人よ。かっこ良くて、素敵でしょ。うん、結婚？　あはは、どうだろうね。それは彼に聞いたほうがいいんじゃない？　あなたこそ、素敵な恋人と一緒なのね。大切にするのよ。それじゃあね。

彼女と別れてから三年間の間に、一度だけ会った。華やかなディスプレイが並ぶショッピングモールですれ違ったとき、知らない男性の腕を彼女は握っており、こちらは今

付き合っている彼を連れていた。彼女のほうが気まずい思いをするのではないかという、懸念と期待が入り混じった気持ちで構えていた。しかし、彼女はそのどちらにも応えることなく、かつてとほとんど変わらない笑顔を見せた。少し裏切られた感覚はしたが、心に靄を残すことはなかった。髪型が以前とは大分変っていたことだけが記憶にある。新しい恋人の好みに合わせたのだろうか。手入れの行き届いた、腰ほどまで伸ばしていた長い栗色の髪は、肩につかない位の長さに揃えられていた。

彼女と過ごしているとき、裏切りは日常となった。彼女は、一人の恋人のみに愛情を注ぐ、ということが出来ない女であった。同時に、不特定多数の人を愛することを常識としていた。しかし、一人より多くの人を愛そうものなら、浮気や不倫と言って責められる。大部分の人は、そういった観念を持って生きている。しかし、彼女は違っていた。淫ら、浮気者などという言葉で罵ったこともあるが、彼女は決して自らの恋愛観に対して省みる点はないという態度をとっていた。

人聞きが悪いわね、私のは浮気なんていうのとは違うわよ。たくさんの人を好きになれるけれども、その好きの気持ちはみんなに対して同等なの。みんな私にとって特別だし、大切に想っているのよ。ほら、考えてみなさいよ。あなたって、甘いものが大好きよね？　バナナオムレットも好きだし、チョコレートも好きだし、フルーツロールケーキも好きでしょう？　今日から甘いものは一つの種類しか食べられません、なんて言われても無理でしょう？　それと同じよ。色んな面でこの理論は通じるじゃない。恋愛の話になったら、どうして例外視されるのか分からないわ、そういう屁理屈で考えることじゃないんだよ。そういう常識なんだからしょうがないじゃない。常識ってなんなのよ？　あたしのやっていることは、別に悪いことじゃない。極論になるけれども、殺人犯のように誰かを傷つけているわけじゃないわ。ほら、あたしよりもずっと頭がいいくせに、こんな簡単なことも説明出来ないのね。

無邪気さゆえの屁理屈というのだろうか。理不尽だとは感じたが、彼女を説き伏せるだけの上手い理屈は思いつけなかった。たとえ、自分が彼女のせいで何遍傷ついたかということを訴えたくなっても、肯定をするほうが格段に簡単なため、毎回結局、楽なほうを選択する癖がついていた。学問は人並み以上にしてきたし、それなりに仕事でも成果を上げてきたつもりだった。しかし、駄作な意見しか思いつけなかった。ここで素晴らしい回答を出せるくらいなら、今でも彼女と上手く付き合えていたのかもしれない。

三

どちらかと言うと、彼女のような外見も生き方も派手な

人間とは、関わりを持たないほうであったし、ましてやそのような人間を恋人にすることなど、一生涯有り得ないことだろうと思っていた。しかし、恋らしい恋もしたことのない人間に、そんなことを決めつけることなど出来るはずもないのである。大学の図書館で、彼女とは出会った。その頃の彼女はかなり華やかで、悪く言ってしまえばちゃらんぽんな印象を受ける見目であった。

歩いただけで汗の噴き出すような、夏の日だった。元来、本が好きであったから、その日も小説の並ぶ棚を物色していた。芳しい石鹸の香りが鼻先をついた。辿った先に、彼女はいた。面白い本ありますか、と尋ねてきたものだから、何冊か本を勧めた。読書なんか全くしなさそうな成りで、そんなことを聞くものだから、はじめはどちらかと言えば、面白がって彼女と接していた。しかし、図書館以外でも会う機会が増え、会話も多くなるうちに、他よりも仲のいい友人となり、ごく自然な流れで恋人関係となった。彼女の恋愛における厄介な癖を知った後は互いに罵り合うことも増えたが、それでも暫くの間彼女と関係を持っていたのは、やはりそれなりにのめり込んでしまっていたからなのだろう。異常性を意識した上での関係であり、別れた後に考えると違和感を覚えるようなものであったが、それでもそのときは、彼女を愛することが正しいことだと盲信していたのである。

日曜日、普段なら会社は休みであるが、海外の取引先との商談が近くに控えていたため、出勤となっていた。勤め始めの頃と比べると、かなり要領が良くなったものである。配布資料などの準備も整え、晴れ晴れとした気持ちで会社の建物を出た。何か、甘いものを食べたくなった。甘いものを口にすると、欲が満たされる音が聞こえる気がする。

駅の地下街には、長らく足を運んだことがなかった。一番最後に来たときとは、違っていた。子供のおもちゃ屋、三軒隣りまで香りを振りまく石鹸屋、大きな遊技場まである。クリスマスが近いからだろうか、どの店も気合の入った看板を立てたり、煌めく装飾で店を彩っている。それらに目をひかれもしたが、特に道草をせず、当初の目的通り、レストランやカフェなど、飲食店の並ぶ通りに来た。どの店も、色鮮やかな看板に、ディスプレイに並んだ食品サンプルが目立つ。一つ一つの店を軽く吟味し、コーヒーと甘いものの品揃えが充実していそうな店舗を見つけた。店内を一瞥すると、流石休日の地下街であるといった感じであった。家族連れや若い男女がほとんどを占めていた。

席を探してさまよっていると、角の席に、彼女はいた。コーヒーに、食べかけのシンプルなドーナッがテーブルの上にあった。彼女は一人で席についていたため、向かいの席は空いている。仕事が上手くいったせいか、彼女との対

面も上手くいくのではないかといった勝手な妄想を膨らませていた。

あの、久しぶり。俯き、手帳に何か書き込みをしていた彼女は一瞬軽く飛び上がり、上げた顔には驚きが現れていた。ああ、久しぶりね、どうしたのよこんなところで、しかも日曜なのにスーツなんか着て。ああ、たまたま仕事の打ち合わせがあってね。そう、優秀な人は大変ね、ほら立ってるのもみっともないじゃない、座れば。ああ、じゃあお言葉に甘えて。

カフェの店員の女の子が、メニューを持ってきた。キャラメルラテありますか、ええありますよ、じゃあそれを一つお願いします、かしこまりました。注文は十秒もかからずに終わった。

今でも甘いの好きなのね。無糖のコーヒーとか好きそうな顔しているくせに、百貫でぶになるのが楽しみね、それなりに運動はしてるから大丈夫、ふうん、でもよくキャラメルラテなんか飲めるわね。あんなの甘ったるくて気分が悪くなるわ、でも美味しいんだからいいの。

運ばれてきたキャラメルラテに、備え付けの角砂糖を三個入れる。角砂糖はすっと溶ける。見た目こそ変わらないが、熱いキャラメルラテは十分に甘くなっていた。うわあ、三個も入れるの。そのうち脳までどろっどろに甘くなるわよ、彼女に小言を言わせておき、湯気を立てる甘い飲み物をよく息で冷まして口づけた。

結婚でもした、ううん、でももうじきだろうね、出来ないわよ、だって別れたもの。え、本当に。どうして、別にあなたが昔馬鹿にしたように二股三股かけたわけじゃないわよ、ただ、私が別れたかったから別れたの。それだけよ。今は一人ね、たまには一人もいいものね。今、人生で一番真面目な時期かもしれないわ、まだミルクパズルやってるの、たまにね、あなたには出来ないだろうけど。

彼女は憂えた顔つきなどせず、若干早口で喋りきった。別れた理由をもう少し詳しく聞きたい気持ちもあったが、流石に野暮だと思い、やめておいた。ただ一つだけ、かつてのような軽口で話せたことに、安堵した。彼女の考えていることなど理解できる筈もないし、完全な自己満足であったが、二人の間の蟠(わだかま)りが少しなりとも取り除けたような気がしてしまったのである。彼女と会話してみるまでは一抹の不安を拭えなかったため、飲み物一杯の時間で済ませるつもりでいたが、もう一度店員の女の子を呼び、少し豪勢なチョコブラウニーパフェを頼んだ。これにより、当

広告承ります
文芸思潮への広告ご希望は広告部まで御連絡ください。☎〇三・五七〇六・七八四七

初の目的はしっかりと達成された。パフェが来たときの彼女のしかめっ面は、しこたま甘いパフェのおかげで懸念されずに済んだ。

一時間ほどを店で過ごし、彼女と一緒に店を出た。切符売り場までの道を、共に歩くことにした。低いヒールの靴を履いている彼女は、並ぶと非常に小さい。昔は、十センチほどもありそうな高いヒールを履き、身長を誤魔化すことに精を出していたものである。見下ろした彼女の髪型は、一番最後に会ったときとほとんど変わっていなかった。

そういえば、髪型変わったんだね、そうね、前の恋人の好み？　そういうことでもないわよ、それが気になる？　いや、気がついたから。ふうん、でも一年くらい前に会ったときにも同じ髪型だったけど、そのときには言ってくれなかったでしょう、ああ、あの時はお互いに恋人と一緒だったし、ゆっくり話す暇もなかったし——。そう、余裕が出来た？　へ、余裕？　やっぱりなんでもないわ、それより、あなたのほうは恋人とはいい感じなの、うん仲良くしてるよ、そう、結婚するんでしょうね。いいわね、結婚式来る？　馬鹿ね、昔の恋人の結婚式に行くあんぽんたんがどこにいるのよ。知らせだけちょうだい、遠くからお祝いしておくわ。いい恋人見つかるといいね、どうかしらね、私みたいなあばずれは幸せになっちゃいけない気もするけどね。クリスマスは一人でお酒を飲みながらパズルでもするわ。お幸せにね、うんそっちもね。何かにつけて小汚い皮肉を飛ばすのは、彼女の癖であった。

彼女と別れたとき、大喧嘩をした。無神経だとか、偽善者だとか、さんざんに言われた覚えがある。確かに、彼女の言う通りの性格が自分の中に確かにあると自覚ができる。しかし、彼女に対しては、その態度で報いる必要があると感じる節もあった。それによって、彼女に多少なり復讐をした気分になり、楽しんでいたことも否めないのである。

四

クリスマスが近くなると、目に見えて人は浮足立つ。普段は真面目腐った雰囲気をぷんぷんさせているような人でも、動きがせわしなくなったり、普段とはまた異なった種類の笑顔を見せる。いつもより早く業務を切り上げても誰も怒らないだろう。今日は早く帰って、彼のために久しぶりに気合いを入れた料理でも作ってみようかと考え、その旨の連絡を入れ、普段より一時間ほど早く退社することにした。エレベーターで降りた一階のロビーには、来客用のソファが幾つか置いてある。ソファの一つに、明らかにビジネス関係の来客ではないと分かる人物が、何をするでもなく膝の上に鞄を抱えて座っていた。たった一日前に会ったばかりの、彼女だった。何故彼女がここにいるかなど思いつきもしなかったし、勝手に自分の勤め先に押し掛けるような真似をしている彼女に若干腹が立ちもしたが、公の場で粗相をするつもりはなかったので、友人だという体で、優しく声をかけることにした。

こんなところで何してるの、待ってたのよ、待つ位なら連絡すればよかったのに、あなたの電話番号なんて知らないもの。三年前に全部消してしまったし、一体何の用があって来たの、長くはしないわ、分かったから一旦外に出るよ。建物を出てから数回靴の音を立てたあとで、彼女は喋りだした。

祝ってあげようと思ったけど、そんなに私はやっぱり、心が善い人じゃないんだわ。私、あなたと別れたあと、あなたと一緒に買ったものとか、あなたに貰ったものを定期的にひとつずつ捨てていたの。人間、思い出って少しずつしか忘れることの出来ないものだから、それに則ってね。そして、やっと最後の一つだけになったのよ。これも捨てようか、と考えていたときに、本当に偶然、あなたとこの前、喫茶店で会ったのよ。タイミングが悪かったわ。私はあなたと会わないために、徹底的に生活の仕方を変えた。行きつけのお店も変えたし、今まで電車に乗っていたのもバスに変えて、とにかくなるべくあなたと会う確率を減らすことばかり考えていた。品物もひとつになって、やっとこれであなたを思い出さなくて済む、ってときに会ってしまった。そして、あなたが結婚することを聞いた。構えていたのに、動揺してしまった自分に呆れてしまったわ。結局、私よりあなたのほうが一枚上手だったんだと思い知った。私はいつまで経っても、馬鹿な女なんだわ。あの日家に帰って、いらいらした反動で最後の品物も捨てたの、ごみ袋の中につっこんで、あなたを完璧に忘れ去ろうとした。だけど、動揺が収まらないのよ。あなたとのことは捨てきったはずなのに。捨てても、余計思い出すだけなのよ。私の三年間がすべて無駄だった気がしてたまらなくなったのよ。って、こんなこと言っても仕方がないことね。私は私が原因で、あなたに愛想を尽かされたんだもの。別に戻って来てほしいなんて、虫のいいことは考えてないわ。

あなたに愛想を尽かされた？　その言葉に激しい疑問を呈したくなった。今まで認識していた事実とは、全く逆だったからだ。そんなはずない、と思った。他に恋人を作り、一人に注げばいい愛情を分ける行為に及んだのは、言い返しの出来ないような理屈をごねたのは、一体誰なのか。果てのない疑問が生まれる。だが、彼女が自分の立場を低くしていることに少なからず快感を覚えた。よって、真実の追求はされずに済んだ。

はあ、と溜息をつき、彼女は続けた。長くなってごめんなさい。本当に大好きよ、幸せになってね。これ以上の迷惑はかけないわ。私のわがままだったけど、言いたいことは言い切ったから。私の遺書を読んだものとでも思って、

許して頂戴。

昔、私を馬鹿にしていた女が、ここまで自分をおとしめている。私のために、泣くことを堪え、目を赤く充血させ、唇を小刻みに震わせ、みっともない姿をさらけ出している。そうだ、今の彼女には恋人もいない。泣きつく男もいないのだ。可哀想、という慈悲を少しも感じなかったと言えば嘘になるが、慰めの言葉が口から出ることはなかった。

馬鹿だね、今更どうしたの？　寂しくなってまた抱いてほしくなった？　いくらでも男なんてまた探せるでしょ、誰だっていいんでしょ。それとも、一回くらいまた抱いてあげようか。

口から澱みなく出てきたのは、酷い言葉の数々。彼女はうつむきながら鞄を握りしめ、足早に去っていった。

その夜は、夜更かしをした。恋人には、友達の家に泊まると言い、本当はビジネスホテルに泊まった。好かない、度数の高いアルコールを一人で呷った。酒を飲めば眠れるだろうという考えだったが、時間が経っても頭は冴えるばかりであった。

ずるい女だ、と思った。罵倒した後、気分はすこぶる良くなり、妙な征服感が生まれたが、上回って襲ってきたのは猛烈な欲だった。静かな彼のもとで、完璧に忘れたと思っていた欲は、ただ抑えられていたのだろうか。彼女の肉体と心のどちらに対する欲なのかは判断しかねた。しかし、彼女と恋人だった時分に培った、猛獣的な欲が引き出されてしまったのは事実だ。彼女とのセックスはとても激しく、潔癖とは正反対だったけれども。

今、精神の弱っているであろう彼女を、欲の勢いのままに襲うことは容易いだろう。だが、それでは昔に彼女を責めた自分に矛盾が生じる。それを避けたい、という思いのほうが勝った。どうせなら、なるべく優位な立場を保っておきたいからだ。一度、世間とはかけ離れた恋を覚えると、二度と忘れられるものではない。正しく直そうとして糸を張れば張るほど、それは切れやすくなってしまう。おさまらない欲を、酒のせいにした。自分の手で、欲を抑えることだけはしなかった。

決断を下すことには、時間を要さなかった。彼女と再会した喫茶店に再び足を向け、あえて大嫌いな無糖の珈琲だけを注文し、一気に飲み干した。三分もかからなかった。その間に、決めた。

五

彼は、よく料理をつくる。少々膨らんだ、スーパーマーケットの袋を右手に提げてきた。半透明の袋から、牛乳の紙容器を確認することが出来た。ああ、今日もするのだな、と思った。袋の中身はその他に、魚と野菜類が少々入っていた。恋人は料理が上手い。作品は簡素なように見えて、味わう時間とともに濃度を増してゆく。恋人自身とよく似ている。白米に汁物、メインの魚料理に野菜の浅漬けといういつも通りのシンプルなフルコース。恋人の料理は好きだ。作り方を習ったこともあるが、忘れてしまった。もっと沢山教わっておけば良かっただろうか。

食事が済み、食器の片付けも終わり、恋人と並んでソファに座り、テレビを眺めていた。まだ頼まれていなかったが、牛乳の存在を確認していたため、それを温めようと台所に立った。丸い鍋に合わせた形となって広がる。同一模様の白。そうだ。この儀式の度に頭にあったのは、一度も完成出来なかったミルクパズルであった。

周りを先に固めて、中を埋めていくのよ。そうすれば簡単に出来るわ。また出来ないの？　あなたって頭はいいのに、こういうことは不器用ね。そんなんだと、恋人を逃がすことになるわよ。

恋人が儀式なんて求める人でなければ、きっと思い出すことなんてなかった。おそらく、彼のみを一生愛することが出来たに違いない。いや、逆であろうか。彼女がミルクパズルなど好んでいなければ、だろうか。この際どちらが原因でも大したことではない。

ほの甘い香りが感じられてきたところで、完成したホットミルクをマグカップに注いだ。牛乳を温める前に、決意はしていた。儀式が完遂される前に、この住処を出る。そして今から、非情なことをする。ためらいは持たなくていい。情は少なすぎるくらいの持ち合わせで構わない。

茶色い革のボストンバッグには、必要最低限のものを詰めた。部屋にある雑貨類等は、かつては優しい気持ちで選んだものたちだ。恋人と選んだものも多くある。だが、今はそれらに、価値などない。左手の指には、まだ永遠の愛を誓う環がないことが幸いであった。手首には恋人からのプレゼントのブレスレットを嵌めていた。白金の華奢な鎖に、静かに主張する小さなダイヤモンドが光る。繊細なチェーンを、引きちぎるように外す。軽いボストンバッグを肩に背負い、何も告げていない恋人のところへ向かった。テレビの画面を見つめ、マグカップを傾ける恋人を見た。ホットミルクは、半分ほどは残っているように見えた。鼓動は激しい。全身の血管にその音が響く。扁桃腺が緊張している。喉を潰すように圧迫する。最後の会話をするために、口を開き、大きく息を吸った。詰まった喉を無理やりこじ開けたせいか、可笑しな声が出た。それに気づき、恋人は振り向いた。恋人の目における白の面積が大きくなる。どうしたの、ボストンバッグなんか抱えて、……今だ。扁桃腺なんか潰してもいいから、今必要なことは兎に角声を出すことだ。そうすれば、彼女のところまで行ける。

ねえ、今日まで有難う。あなたの恋人でいることが出来て、幸せだった。あなたと、結婚したいとまで考えていた。あなたといれば、何も怖くないだろうね。だけど、もう今からあなたといることは出来ない。もう、あなたのもとに戻ることは出来ない。だから、理由を言う必要もないと思う。あなたは素敵な男の人よ、少なくとも私が出会った中ではだんとつよ。素敵な女の人を見つけてほしい。勝手に決めてごめんなさい。でも、もうあなたとはいられない。あなたのことは今でも好きよ。淡泊だけど質のいい料理も好きだし、大事に抱いてくれるところも好きだし、無言でも心地よいところも大好きよ、嫌いなところなんて一つもないのよ。だけど、あなたの恋人ではいられない……喋り通した。自分で言っていて、非常に理不尽だと感じた。これでは、彼女のことを責めることなど出来ようもない、と少し可笑しくなった。彼女よりよっぽど酷だ。彼女に感化されたのかもしれない。威勢よく言いきって、思い切り出ていくはずだった。しかし、頬が冷たい。どんどん濡れていく頬と比例して、視界に靄が生じる。

彼は一言も挟まず、最後の台詞まで耳を通した。そして、ソファから立ち上がった。恋人の左目の視線が右目に、恋人の右目の視線が左目にぴったり合った。まるで照準を合わせるようだった。目の前は滲んでぼやけていたが、それははっきりと分かった。彼は鈍く唇を開いた。

そんなに大事な人がいたの、僕といる間もずっとその人のことを考えていたの？　お願いだから、僕の目をきちんと見てほしい。

左腕を握る手の力は今までに感じたことのない種類だった。彼もやはり男という生き物である、優しく抱く腕や、繊細な指しか感じたことがなかったが、こんなに強い力を持っていたのか、とその意外さに感心した。

彼は机の引き出しから取り出した。

待って、これだけ持っていってくれないか。臙脂色の小さなベルベットの箱を渡してくる。君に渡すつもりだった指環だ。明後日のクリスマスに、受け取ってもらうつもりだった。恋人という関係をそろそろやめてもいい時期だと思っていたから。もし少しでも心が揺らいだならば、俺のところに戻ってきてくれ。だけど、何とも思わないならば、この指輪をどこかに投げ捨ててほしい。

彼と両目を合わせながら、右目の視界の四分の一で壁掛け時計を眺めた。細く、簡単に折れそうな秒針が止まらずに動く。一秒は長すぎる。一秒あれば、何でも出来る。もっと涙が出そうだ。恋人から両目を反らし、肩にかけたボストンバッグの持ち手を両手で強く握り、玄関まで走った。無我夢中でごみ捨て用のサンダルを突っかけた。がちゃがちゃと乱暴に解錠し、外に出た。足は、疲弊なんて感じなくなっていた。

静かな住宅街を抜け、正反対な街中を抜け、再び静かな住宅街に出た。エレベーターは七階で止まっていた。素通りし、階段を使って四階まで駆け上がった。

チャイムを鳴らす。出ない。もう一回鳴らす。出ない。夜だったが、思い切って控えめにドアを拳で叩いてみた。静まり返った夜に、ドアのチェーンと鍵を外す音が良く響いた。

こんな夜遅くから何、しかも何よ、その格好、ボストンバッグなんか持っちゃって。家出でもしたの？　え、なんで開けないのかって？　非常識な時間帯に来たのは誰なのよ、もしかしてチャイム鳴らした？　今ちょうど壊れているのよ。とにかく夜から騒いだら迷惑だから、中に入って……

後ろ手にドアを閉める。鍵を閉める。バッグを床に投げるように置く。彼女をきつく抱く。無理やり口づける。

一寸、やめてよ、何がしたいのよ、暴れる彼女を抑えながらかかえ込み、ベッドまで運ぶ。自分よりも小柄な彼女の上に覆いかぶさる。抱かれることが当たり前になりつつあったが、久しぶりの抱く立場は高揚した。抱かれることでは決して満たされることのなかったものが、体の芯まで浸るように満たされる。総毛立つほどにぞくぞくする。

裏切られた、とばかり思い込んでいた。しかし、彼女は無邪気だった。それを、見て見ぬふりしていたのは、自分のほうだったのかもしれない。今、彼女を自分は抱いている。この瞬間も、彼女は傷ついているのではないのか。しかし、欲望を満たしたい。満足のいくまで彼女を抱きたい。三年分の欲望は、堰き止める術など知る由もなかった。でも、欲を横溢させる機会をもうけたのは彼女である。その程度の言い訳はつけておかないと、罪悪感に押されてしまう。もしかしたら、嫌われるかもしれない。一切合切を賭してここに来たのに、もう何も手元に残らなくなるかもしれない。

今の私は狡い。彼の恋人、もとい女だったときとは違う。だが、かつての偽善者であった私よりはだいぶましだ。

こういうことも出来るのね、優等生の癖に。ごめん、怖かったでしょ、なんで謝るのよ、その必要はないわよ。本当に怖かったら、警察でも呼んでるわよ、……まあ刺激的で、悪くなかったわよ。あんなのやられたら、ほとんどの女はいちころね。体の快楽に落とされたわけじゃないわよ。あれは完璧にあなたの勝利だわ。

それより、早く恋人のところに帰りなさいよ。どうせ喧嘩でもしたんでしょう。マリッジブルーということで免じてあげるわ。今日のことは、一寸した火遊びよ。私は忘れてあげるから、いや、もう彼とは別れてきたの、え？　本当よ、洋服を少しと、通帳だけ持って出てきたの、あなた

馬鹿じゃないの。全く頭がいいのか悪いのか分からないわ、そっちに似たのかもよ、冗談言っている場合じゃないの。あんなに酷く罵倒したくせに、翌日にはこんな風になるなんて、あたしよりよっぽど単純じゃない、誘ったのはそっちのくせに、何言ってるの、最初に声かけてきたのあなたでしょ。

でも、と彼女は言った。あなた一人にずっと、執着することが出来るかどうかは、分からないわよ。また昔みたいに、あなたとは別に恋人をつくることもあるかも知れない。あなたを前よりももっと、傷つけることをしてしまうかもしれない。それでも構わないの。私は所詮、くだらない女よ、はみ出し者よ。あなたみたいにお利口さんじゃないし、頭も良くない。だけど、私は私の生き方を変えられる自信なんてないわ。もういい歳になっちゃったし、私の中の基本的な思考回路は固まってしまっているのよ。新しい私になることはできないのよ。ただの馬鹿よ。ミルクパズルくらいしか特技なんてないわ。

ひとつだけ、聞いてもいい？　いいわよ何、最後に捨てた品物って何だったの、あなたからもらったミルクパズルよ。ちゃんと額縁に入れてあったのを、一気にはずして捨てちゃったわ。まだそれ残ってるよ。え？

ベッドから立ち上がり、脚の影に落ちていた、小さな白いパズルのピースを拾い上げ、彼女に渡した。彼女をベッドに運ぶときに見えたのだ。

まだ残ってたのね、だから忘れきれなかったのかしら。彼女はくすりと笑い、渡されたピースを、机の引き出しの中にしまった。どうするの、それ捨てるの？　ううん、取っておくわ、すべてがいい思い出じゃなかったけど、やっぱり忘れちゃいけないことだと思うし。謝ることのできない、私なりの懺悔よ。

十二月二十四日。イブの街は明るく、同じように明るい表情の家族連れや恋人達が多く見られた。

少しだけ長い距離を歩いて、彼女に連れてこられた場所はおもちゃ屋であった。親戚の子にプレゼントでも買うの、と尋ねると、違うわよ、といい、足早に目的のコーナーへと向かう。彼女に手を引かれ、何も考えずにただ歩を進めた。着いたのは、パズルコーナーだった。額縁に入れられた完成品が、棚の上にいくつか飾られてある。風景、建物、動物、名画、果物。どれも、色彩は豊かだ。彼女がかつて、よく遊んでいたような白一色のパズルはそこには飾られていなかった。

どれがいい、と彼女が言った。え、私が選ぶの。そう、何回かここに足を運んだけれど、選びきれなかったの。だから貴女が選んで。そして、それを私へのプレゼントにしてほしい。大事にするわ。その代わり、貴女が本当にいいと思ったものにしてちょうだい。

たくさんの種類のパズルがあったが、ひとつひとつ手にとり、じっくり観察した。すべてを確認し終わったとき、一つだけを選択肢とすることが出来ていた。

決めた、じゃあ買ってきて、私は買っているところは見ないわ、帰ってからのお楽しみにするの。ほら、適当にうろついとくから。ミルクパズルじゃないけどいいの、私だってたまには達成感を味わいたいわよ、そう言って彼女は笑った。プレゼントなんだから、きちんと包装もしてよ、リボンの色は赤がいいな。私が離れないように、願掛けでもしておいたらいいわよ。

お店の入り口で待ってるわ、と彼女は軽く身を翻して店の外に歩いていった。彼女が完全に店を出たのを確認してから、パズルを手にとった。ミルクパズルに慣れた彼女にとって、きっと簡単すぎるものだろう。だが、鮮やかな色遣いのパズルは、新しい恋のはじまりを祝う品物としての役割をきっと果たしてくれる。彼女の言った通り、プレゼント用の包装を店員に頼んだ。赤いリボンが固く結ばれるのを見届け、パズルを受け取った。外に出ると、彼女がいた。遅いわよ、と悪態をつきながらも、どことなく嬉しそうな表情をしていた。

楽しみね、どんな難しいパズルかしらね。それ皮肉、期待してるのよ、どうせすぐ完成させちゃうくせに、たとえ簡単でも大事にじっくり完成しちゃうわよ。あなたと一緒にするつもりなんだからね。

私と彼女に、将来の関係性なんて期待できない。しかし、今に対しては、ちょっとくらい期待してみてもいい気がするのだ。ただ、私はもう、牛乳は温めない。

文芸思潮新人賞 優秀賞 受賞の言葉　倫子

この作品の大元は、私が二十歳の頃に書いた短編小説です。昔から自分自身のことを好きになることがなく今日まで過ごしてきましたが、この賞を頂き、自分に自信を持つことができ、自分のことを好きになる日が来るのではないかと嬉しい気持ちでいっぱいです。

小説を評価して頂き賞を頂くことは、ずっと夢見ていた事なので、非常に光栄です。貴重な体験をさせてくださった関係者各位に感謝致します。

倫子
りんこ
1994年生まれ
沖縄県出身
K大学経済学部卒業
現在は税理士事務所勤め

第3回
文芸思潮 新人賞
優秀賞

ラムの不法労働

壁 晃弘

大きな宝と書いて大宝建設、「従業員こそ会社の宝」が社是で、新築の小さな事務所にも、売れない書道家が書いた墨字で、堂々と額縁に飾られている。一昨年前に亡くなった会長は、男気一つでこの地域の人夫をまとめ上げ、この会社を起こした。特別な技術を駆使して利益をあげるのではなく、動ける人を集めて、いっぱしの街ならそこら中にある建設現場に雑工を送り込んで、一人当たりの人夫代からピンハネをすることを主な生業とする会社だ。特別な技術がない代わりに、簡単に入社することができる、特別な技術がない故に一人あたりの単価が安い、単価が安いから作業員の給料も安い、そんな会社に僕はいる。日々動く、八〇名ほどの作業員で造成される錆びついた歯車の一部だ。

会長存命の時代は、常時二〇〇人ほどの作業員が動いていたそうだが、今は半分以下に減っている。それに全員が会社の本体の人間ではないらしい。怪しい派遣会社や個人のブローカー、どこかで借金を背負い売られてきた者などさまざまな経路でこの会社にいる。建設業の最底辺の人々のプラットホームのようなものだ。一枚岩でないからチームワークもないし、助け合うよりも偶然のふりをして足を出し、他の者を転ばせようとするような集まりだ。

景気の良い時に建てられた、一見廃墟にも見えるこの会社の寮には、大きな食堂と今時珍しくツケで商品を買える売店がある。無一文でも体さえ動けば入寮させてくれるこの寮は、僕のようにゼロからやり直そうとする人にはありがたかった。こんな古い外観でありながらも、中は寮母のおかげでいつも綺麗だった。ベトナム人実習生が一〇人いて、彼らが寮の設備の優先使用権を牛耳っていた。個々で生活している日本人の総数は多いが、集団で固まって寮の物事を進めるベトナム人たちの勢力には敵わない。日本語もほとんどできず、生活態度の悪い彼らとは、僕も距離を置いて過ごしていた。目標に向かって集中する、これが今の自分にできる唯一のことだから。

大宝建設の朝は早い。遠くの現場に行く者も、幸運なことに近場に行く者も、全ての者が毎朝六時に集合しなければならない。もちろん、その時間から給料が発生するわけではない。魂を抜かれたゾンビのような重い足取りで集まる作業員たちは、前日に張り出された予定表を元にそれぞれの現場に向かっていく。大半はチームになって一緒に向かうが、作業に関わること以外の会話はない、僕にはそれがありがたい。作業自体は八時に開始するので、いつも時間を持て余す。車に乗り込み現場まで向かう時間、現場についてから作業開始までの時間、自分では管理できない時間が呼吸を苦しくする。四ヶ月、僕の修行は四ヶ月。この期間を捧げることが贖罪なのだ。その後は南半球に行って、人生をやり直す。

この会社に来て一ヶ月が経った。現場の場所と共に働く作業員以外は、何も代わり映えのない日々が駆け足で過ぎていく。最近はベトナム人たちを乗せて、自分の運転で現場に行くようになってきた。朴訥で従順な僕を会社も信用してきたのだろう。技能実習生であるベトナム人たちはほとんど日本語が話せない。現場で覚えた言葉は、周囲の作業員の影響を受けたおかげで品のない野郎言葉ばかりだ。それでも、建物内部で解体されたゴミを搬出したり、バールを振るって内装を解体する作業に高度な言語は要らなかった。会社の予定表上は僕がリーダーになっているが、彼らの方が現場を熟知しているため、現場での指示はいつも彼らがしてくれる。横柄な態度や言葉遣いに時折心を乱されることもあるが、気に留めずに作業を進める。僕には時間が限られているから。

そんなある日のこと、現場から戻り、明日の予定を確認すると、普段見かけないベトナム人が予定表に載っていた。「ラム」というテプラが貼られたマグネットは、僕の名前入りマグネットとペアになって貼られていた。

「明日からM建設の監督の雑工だ。夏中はずっとこいつと行ってもらうから、頼むな」

部長が僕の右肩をポンと叩きながら言った。この人のボディタッチは寮に出るゴキブリよりも嫌い。わかりました、でもこの人も技能実習生なのですか？　と僕は顔も見ずに

聞いた。

「ビザは実習生だな。中島さんのところからの訳ありの奴だから。二ヶ月くらいのことだし、まぁ気にせずにいつも通りやってくれ。」

「はい」と答え、「お疲れ様です」と機械的に言って僕は寮への帰路についた。中島さんは二度ほど見たことがある。六十を過ぎた初老の男性で、昭和の雰囲気を全面に出した変わり者だ。いつもどこからともなく人夫を見つけてきては、この会社で働かせ、その労働の対価を搾取する商売をしている。会長がいた頃の最盛期には、多くの人夫を入れて、それなりに稼いでいたらしい、と古株の一人から聞いたことがある。人材ブローカーといったところだ。それにしても、入国制限がされている今、どうやってベトナム人を連れてきたのだろうか。そんなことを考えながら、シャワー室に行くと、いつも通り空きがなかった。各シャワーの前には、次の人の衣服かごが置かれ、順番が回ってくるのはまだ先だ。先に飯でも食べようと、キッチンに行くと、コンロの上は鍋やフライパンで埋め尽くされ、ベトナム人たちが発泡酒を片手にベトナム語で騒いでいた。

「おい、ビールのむか?」

先月よく一緒に仕事へ行ったフーというベトナム人が僕に言った。「いらない、ビール嫌い」と返すと、親切を仇で返されたようにフンっと鼻で息を吐いて、また仲間達と話し始めた。ビールと発泡酒の区別のない世界観を否定したい気持ちもあったが、彼らとの議論は何も生まない。アメリカに勝ったことだけが自慢の民族。料理を作ることも諦めてキッチンを出た。家と銘打つ場所で自由を奪われるのは、なかなかきつい。マックスバリューに行き、安くなった唐揚げ弁当とビールを買って部屋に戻った。食べて飲むと睡魔が現れる。朝が不当に早いから当然だ。眠ってしまう前に、と重たい足を引きずってすっかり汚れたシャワー室にいき、身を濯いだ。排水溝からは小便のにおいがした。部屋に戻ったとき、時計の針はちょうど九時を指していた。あと少し、後三ヶ月、まるで出所を待ち侘びる懲役囚のような独り言と共に早い眠りについた。

東側に窓がある僕の部屋では、カーテンを少し開けているだけで強烈な朝日が差してくる。朝日には動物の目を覚ます能力がある。すぐにベッドを綺麗に整えて、歯を磨きに洗面所へ走る。ギガジン*の記事でアメリカの海兵隊が、起床後すぐにベッドメイキングをすると読んで以来ずっと続けている習慣だ。朝の洗面所はもちろん満員。忙しなく動く人々の間を抜けて、最低限の準備をしたらすぐに外に出る。ブラックコーヒーを朝飯がわりにごくごく飲んで、準備万端。昨日確認した通り今日から新人と二人での現場だ。続々と作業員が集まってくる。寮に住んでいる者、近

＊ GIGAZINE= インターネットのニュースサイト　2022年７月の時点で月間アクセス数は約３億。GIGAZINE は GIGA と MAGAZINE の造成語

くにぼろアパートを借りている者、会社に借りてもらっているベテランたち、元々近所に住んでいる者。六時になった。皆がそれぞれの現場に向かって出発していく。立派な書体で社名が印字された、８８８８のナンバーを付けた社用車に乗って。

部長が僕の名前を呼んでいる、傍らには初めて見るベトナム人がいる。ベトナム人にしては珍しく、背が高い。短髪を鋭く揃えた好青年。

「おはようございます！　わたしのなまえは、グェン ヴァン ラム といいます。ラムとよんでください！」

近所の人も思わず起床してしまうような挨拶に僕はたじろいだ。そして頭を軽く下げながら握手を求められて驚いた。ベトナムにも礼儀ある者がいるとは。

「よろしくね」僕は名乗って差し出された手を強めに握った。握手は強めに握らないと舐(な)められる、これもどこかでインプットした情報が、アウトプットされている。

「こいつは結構日本語できるからな、じゃあ頼むな」と言いながら部長はまたポンっと肩甲骨あたりを叩いた。

社用車のエブリィに乗り込んで、下道で一時間ほどの道のりを走り出す。ラムくん、現場に着くまで時間がかかるから、寝ててもいいよ、と身振りを交えて伝えた、他の日本人の運転手は、車内の移動中に同乗者が寝ていると非常に怒るようだが、僕は真逆の対応を取る。

「だいじょうぶです、わたしははやくねましたから、あなたはやさしいですね。」

ラムは綺麗な日本語で答えた。寮にいるベトナム人たちのような独特の吃音もない、綺麗な言葉。「あなたは、日本語わかるの?」

「はい、わかりますよ、私は三年くらい、日本にいますから」

「そうなの?　でも寮にいるベトナム人は三年いても、全然日本語わからないよ」と僕が返すと、ラムは笑って、

「そう、実習生は日本語のべんきょうしないから、あまり日本語わからないよ」と付け加えた。

「はぁ〜」と感嘆の言葉が自然と口から出た。そうか、彼は実習生ではないのだ。留学とか何か、寮にいるベトナム人たちとは違う形で来日しているのだろう。あらためて見ても顔立ちもよく、目も輝いている。同じ国籍の中の別の人種だ。それから僕たちは、互いのいろいろなことを話し合った。ラムさんは現在三一歳で、結婚していて五歳の娘と三歳の息子がいるということ。幼い子供たちのために大きな借金を負って日本に出稼ぎに来たこと、もうすぐ来日して三年が経つこと、好きな日本食はラーメンであることなど、僕たちは互いの個人情報の交換を行なった。自分でも驚いたことだが、普段この会社の作業員やベトナム人たちとは全く会話などしなかったのに、ラムさんとは初対面で心が開かれた。僕のベトナム人への偏見を粉々に打ち砕

いたラムさんに、感謝した。

現場の作業は、掃除や業者の出したゴミの処分、荷物の移動にまた清掃、足場の階段を使って、ヘルメットで守られた頭をぶつけながら屋上に荷物を運ぶといった感じの単調でつまらないものだったが、ラムさんはどんな仕事も一生懸命にやっていた。

休憩の時間に、ラムさんは家族や故郷の写真を見せてくれた。美しい遺跡群をもつニンビンという彼の故郷は、バイクだらけの汚い密集した街という僕のイメージとは程遠い、熱帯特有の穏やかな緑に囲まれた場所だった。

「きれいな場所だね」

心からの賛辞が漏れる吐息のように口を出た。

「いなかですよ、なにもない。しごともない。にほんの方がいい」とラムさんは謙遜した。

「いつか行ってみたいな」そう言いながら僕は自分が三ヶ月後にいく異国へ想いを馳せた。

二ヶ月月が経った。現場での作業を終え、汗でずっしり濡れた服を着替えて帰りの車に乗り込むと、ラムさんが珍しく浮かない顔で、

「きょう、ビールをのみませんか？　わたし、りょうりするから」

と誘ってきた。そういった異国文化に触れ合うことは、何かと楽しいことに違いないという好奇心と、何か話したいことがあるのだと直感的に思い、二つ返事で了承した。

ラムさんはほっとしたような顔で、ありがとうございますと言った。どんな接待が待ち構えているのか、どんな話をしてくるのか、お金のことでなければどんなことでも協力できるが……

会社に着いていったん別れる前にラムさんのアパートの名前を聞いた。近くの川沿いの○○荘というアパートで、Google Map で確認すると、歩いて一〇分ほどで着く距離だった。令和に馴染まぬその名前が、手前勝手に憐憫の情を湧き立たせた。

少し早めに出て、近くのコンビニでビールを半ダース買って持っていくことにした。日本人として、また客人として礼を尽くすのは当然のことだ。礼には礼を、だ。この会社に来てから初めての会食ということもあり、アパートに近づくに連れてテンションは上がっていった。

一〇分もたたないうちに○○荘に着いた。塗装が剥がれた外壁には、所々ヒビが入り、重たい雰囲気を醸し出していた。一階と二階に三部屋ずつあり、二階の一室がラムさんの部屋らしい。ドアは開け放たれていた。錆びた階段は、足を進めるたびに悲鳴のような鈍い音を立てた。音を聞きつけたのか、ラムさんが入り口から顔を出した。

「いらっしゃいませ！　さぁはいってください！」

僕は買ってきたビールを渡して、ラムさんと握手した。狭い玄関には、靴がびっしり詰まっていた。汚れて、踏み潰された靴が乱雑に。玄関から入ってすぐキッチン兼廊下があり、キッチンの反対側に浴室と便所がある、よくある古いアパートの間取りだ。奥の部屋にもう一人いるのが見えた。ラムさんだけだと思っていたので少し戸惑ったが、それを察したのかラムさんが言った。

「ぼくの、ルームメイトの『クン』です」

まだ若く、刈り上げられた髪と右手の甲まで広がったタトゥーを持ったその青年も、笑顔で僕に挨拶してきた。どこか怯えたような影があるが、少女漫画で描かれるようなキラキラした目が印象的だった。

部屋の真ん中には鍋が置かれ、その周りに野菜や鳥や豚の肉や麺が鮮やかに並べられていた。グツグツ煮られている鍋のスープは赤みがかっていて、辛そうな湯気を出していた。三人で鍋を囲むように陣取ったところで、ラムさんがビールを配った。

「きょうは、きてくれてありがとうございます。それでは、のみましょう！　乾杯！」

各々が缶を開け、ぶつけ合った。僕は緊張をほぐすために一気に飲み干した。それを見た二人も、まるでそうしなければいけないかのように一気に飲んだ。その後は、ラムさんが鍋奉行となり、この場を仕切った。僕を客人としてもてなそうとしてくれる姿勢がとても心地よかった。ビールを一気飲みしたことで、お見合いのような堅苦しい雰囲気も飛んでいった。僕はまずクンさんのことを知らなければと思い、色々と質問をぶつけた。なぜ日本に来たのか、いつ来たのか、家族構成はどうで、好きな日本食は何か、など少しずつ聞いていった。クンさんはそんなに日本語が上手ではないので、ラムさんが通訳したり、Google 翻訳を使ったり、合間にビールの缶での乾杯を挟みながら、僕たちは親交を深めていった。

驚いたことに、クンさんはまだ二〇才で、今年の一月に日本に来たばかりだった。今年はずっと入国制限があったが、ちょうど緩和されたタイミングで入国できたらしい。ラムさんとは別の、近くの鳶の会社で仕事をしているらしい。父は早世し、兄弟はなく、母を一人、故国に残しているようだ。母が一〇〇万円以上借金をして、彼を技能実習生として日本に送り出してくれたそうだ。女手ひとつで育ててくれた母に、家を買ってあげたくて日本に来たのだと言った。僕は素直に感動し、会えていない自分の母のことを想った。

「すごい、すごいよ。あなたたちは。家族のために日本に来て、毎日頑張って仕事をして、お金を送っているなんて、本当にすごい！」

僕は思ったことをそのまま口に出し、心から彼らを称賛

したつもりだった。

「ちがう、すごくない、すごくない」

とクンさんは予期しない否定を僕に投げつけた。戸惑う間もなく、彼はベトナム語でラムさんに話し始めた。早口に聞こえるのはこの言語特有のリズムだろうか。ラムさんもわかっていると言ったような様子でクンさんを制しながら聞いていた。どちらも顔が赤い。少し興奮した様子で話し終えると、クンさんは顔を手で覆って俯いた。この急展開に、クンさんはまだ若いし、母親の話でホームシックにでもなったのかな、と思った。空気がぐっと重くなった。そしてラムさんは僕の方を向いて話し出した。

「おどろかせて、すみません。クンさんは、四月からおかあさんと、れんらくをとってません。クンさん、じっしゅうから、にげました。」

実習から逃げる？　よく意味がわからなかったが、ラムさんの言うところによると、クンさんは二月から福岡県の解体工事会社で実習を開始した。しかし、長引く不況の影響もあり、また、来たばかりで日本語能力が低いという理由で大手ゼネコンの現場に入ることができず、初月から雇用契約書の条件よりも出勤日数が少なかった。手取りは七万円ほどで借金の返済を考えると、ないようなものだった。三ヶ月間この状態が続き、祖国の母からも強い口調で責められることも多くなったため、三回目の給料日の翌日、彼はその会社の寮から逃げ出した。それ以来母とは一切連絡を取っておらず、各地を転々としながらここに行き着いたのだった。母は心労で入院した、と人づてに聞いたと涙していた。約半年の逃亡生活のような日々はクンさんの心の安定を奪っていったようだ。今のビザのままでは捕まってしまうかもしれない、そんな恐怖の隣人として過ごす毎日、この輝く目をもった未来ある若者が過ごすにしては、あまりにも過酷な日々。僕は言葉を出せなかった。追い討ちをかけるようにラムさんが言った。

「わたしも、おんなじです」

驚きよりも悲しみが深かった。いつも笑顔で、愛する家族のためにどんな仕事でも一生懸命、他の実習生とは違い日本語まで勉強して上達しているラムさん――彼についていた暗い違和感の正体が、今僕の前に現れた。

ラムさんは鹿児島の鳶（とび）の会社に入った。毎朝六時に土場に集合、積み込みなどの準備を開始する、それから現場に出発し、八時から仕事、一七時に終わってから、また土場に戻り、荷下ろしや片付けなど、二〇時や二一時まで仕事をする毎日だったそうだ。もちろん残業代は計算されない。

一緒にベトナムから来た同僚たち二人は一年目で耐えかねて、早々に失踪した。しかしラムさんは、そんな中でも家族のため、と頑張って働いていたそうだ。この厳しい生活も二年が過ぎ、実習生として最後の年を迎えた昨秋、今

まで仕事だけは絶えることなくあった会社に、急に仕事がなくなってきた。出勤日数は二〇日を切り、給料も当然減った。会社や組合に窮状を訴えたがなんら変化の兆しは見えず、このままではベトナムに残す家族に影響が出ると思い、以前失踪した元同僚を頼って、鹿児島の地を後にしたそうだ。送金以外でコツコツ貯めていた貯金は手引きした人間に全部支払った。

これが、いわゆる失踪の経緯らしい。失踪後の生活も悲惨なもので、元同僚のしていた解体工事のバイトも二ヶ月でやめ、その後はFacebookで知り合った同じ境遇のベトナム人たちの情報をもとに、埼玉・三重と居を変えた。給料は手渡しなので、辞めた月の給料などはもらえないこともあった。失踪している身なので、警察や労基に行くこともできず、泣き寝入りするしかなかった。そして二ヶ月前に、同じ境遇として知り合ったクンさんに中島さんを紹介してもらい、現在に至るということだった。

予想もしていなかった告白は僕を興奮させた。理不尽な扱いを受けていた彼らが、どんどん窮地に追い込まれていく、不公平な取引の連続、自国でこんなことが起きているなんて耐えがたかった。小学生の時、いじめっ子を背後から叩きのめして以来ずっと潜んでいた正義感が、久方ぶりに現出した。

「わたしは、たすけを、ひつようとしています。あなたは、あたま、いいから、わたしたちを、たすけてください。」

酔いはラムさんの悲嘆を増幅させていた。クンさんは項（うな）垂（だ）れたまま、新しいビールの缶を開けた。こんな不公平が起きていいはずがない、先進国日本の誇りにかけて、僕は彼らを助けるために尽くそうと思った。

「大丈夫、僕がいろいろ調べて、たすけられる道を探すよ、安心して」

そう言ってから、景気づけに再び乾杯をした。ぐいっと飲み干して、僕は自分の左胸を叩きながら、大丈夫、大丈夫、任せておいてと何度も言った。心からの気持ちが、そんなジェスチャーを繰り返させていた。

締めの料理は、焼きそばを煮えたぎる鍋に入れてほぐしたものが振舞われた。彼らはラーメンと呼んでいたが、パッケージにははっきりと焼きそばと書かれていた。おいしい、おいしい、と互いに声をかけながら食べていると、本当においしく思えてきた。

「ありがとうございます、ありがとうございます。」

何度も頭を下げながら二人は僕をアパートの下まで送ってくれた。僕の姿が見えなくなるまで、目いっぱい手を振っていた。酔った頭を回転させながら、僕は帰路についた。

翌朝、軽い頭痛を伴う気怠さと共に目を覚ました。昨晩の、異世界に転生したかのような非日常的な体験は、未だ

に心に興奮の炎を残していた。そうだ、彼らと約束したのだ。何か彼らの助けになれる情報を集めなければ。近くの自販機にブラックコーヒーを買おうと外に出ると、曇天の空からは今にも雨が降り出しそうだった。自販機の抽選のハズレを見届けてから、コーヒーを飲むと、カフェインが身体にしみわたり、脳にまで達する。ノートを取り出し、昨日聞いた情報を整理しながら書き連ねていった。

ラムさん　二〇一八年九月に入国　二〇二〇年の九月に失踪　現在のビザは技能実習2号ビザで期限は今年の九月二四日、あと一ヶ月余りしかない。

クンさん　二〇二一年一月に入国、四月に逃げ出した。現在のビザは技能実習1号ビザで、期限は一月の二〇日。入国から失踪までの期間が短い。この文章だけ見ると逃げ出すために日本に来たのではないかとも思えてしまうが、クンさんと実際に会って窮状を聞いている僕にはわかる。彼は親ガチャならぬ、企業ガチャでハズレを引いたんだ。ただそれだけなんだ。

昨日送ってもらった彼らの在留カードの写真を見ながら書き連ねる。1号や2号など仮面ライダーみたいだ。3号や4号もあるのだろうかと気になって調べたら、3号までしかなかった。就労制限の有無、という欄には、在留資格に基づく就労活動のみ可、と書いてある。在留資格とは技能実習1号や2号のことはわかったが、これに基づく就労活動とはいったい何なのだろう？　普段目にしない単語の連続は思考を停止させかけたが、呼び起こされた内なる正義感が、再び思考を回転させた。Google で在留資格に基づく就労活動について調べてみると、技能実習ビザの場合は、実習を受けると最初に決めた会社での就労という意味だということがわかった。つまり、失踪する前に働いていた企業でしか働くことができないということだ。二人とも、在留資格の期限はまだ残っているが、現在働いていることは違法ということになる。それは本人たちも、今思えば会社もわかっているようだ。

ということは、彼らを助けるには、①前の企業で実習に戻る、②現在の在留資格を変更するという二択になる。①は、そもそも彼らが失踪しなければならなかった環境に再び戻る、ということで、現実的でないし、彼らも望まない。となると、現在のビザを変更するしかない。とるべき道は明らかになったが、そこに至る方法が全くわからない。

蛇の道は蛇、こうなれば専門家に助言をもらうしかない。

「外国人」「ビザ」「変更」と検索すると上から順に行政書士やら弁護士やらのウェブサイトが我先にと出てきた。

外国人のビザ変更手続きのことなら　〇〇行政書士事務所にお任せください！

累計実績一万人突破　ビザ専門家集団　〇〇行政書士法人……

広告をかけて上位に表示されているウェブサイトはなんとなく信用できないから、それを避けてスクロールしていくと、この寮の最寄駅からすぐそばの石田行政書士事務所のウェブサイトを見つけた。無料電話相談実施中と書いてある。さっそく電話をすると、

「はい、石田行政書士事務所です」

と滑らかだが、どこか癖のある日本語で受付の人が答えた。ビザの専門家だから、スタッフも外国人を雇っているのだろうと思いつつ、石田先生に相談したいことがある旨を伝えた。現在のビザは何ですか？と聞かれ、自分のことではないが、と心の中で前置きをして、技能実習1号と2号です。と答えた。少々お待ちください、と言うと同時に保留音でパッヘルベルのカノンが流れた。

「はい、石田です。現在技能実習ビザということですが、特定技能ビザへの変更を希望ですか？」

「あ、いえ、すみません。私の友人たちなのですが、その特定技能とかよくわからないのですが、ビザを変更したくて。技能実習から失踪して、今もそのビザのままなのです」

「失踪？」

軽い落胆が電話越しに伝わった。

「失踪ですか、ベトナム人ですよね？　そうなるとビザの変更は、通常はできませんがね。そのご友人たちの日本語能力はどうですか？」

「一人は三年近くいるので、結構できます。もう一人は今年来たばかりなのであまりうまくはありません」

と聞かれるがままに答える。

「今年来たばかりで失踪したのですか、それは問題児ですね。その結構できるほうはN4相当ありそうですか？」

「N4ですか？　すみません、全然そういう専門用語わからなくて……」

「日本語能力検定のことですが、まあいいです。今はコロナ禍で帰国便が飛んでいませんからね、特別に短期滞在ビザというのがもらえますよ。失踪した人でも、誰でもね」

「そうなんですか！　誰でもですか！」

「そうですよ、今は鎖国状態ですからね、特別に発給されています。まずは入管に連れていくことでしょう。そこで帰国したいが、帰国できないと伝えると、その日のうちに出るはずです。そうしてから、日本語の出来る方を私の事務所に連れてきてください。もしかしたら特定技能ビザの要件を満たすことができるかもしれないですからね」

外国人材の雇用なら
技能実習制度・特定技能制度の専門家
WIN国際協同組合まで
TEL　〇五二・三六四・九六六六

「ありがとうございます！　すぐに入管に連れていき、その短期滞在ビザをとってみます」

専門家のなんと心強いことか、そして長く続くこのコロナに初めて感謝した。

「そのビザが取れたら、必ず先生の所に連れていきますね、必ずです」

「お役に立てて何よりです。入管法22条の4が適用されていなければよいですがね」

と先生が言っているときには、僕はお礼とビザ取得後に必ず連れていくことを繰り返して電話を切った。きっとその特定技能ビザを取得するときには、先生に何か旨味があるのだろう。求めていた情報をまさに提供してくれた石田先生には感謝しかない。必ず約束を守ろうと思った。

不法滞在ではないが、仕事はしていけない、だがビザはある、という量子のような曖昧な状態で、日本で生活するというのはどれだけの苦難か。あえて狭き門より行く苦難。

急いでこの情報を二人に伝えたいと思い、ラムさんに電話をしかけたが、ワンコールもしないうちに切った。会って伝えよう、会って伝えたいと考え直したからだ。僕は部屋の鍵も掛けずにラムさんの家に向かった。

ラムさんのアパートのドアは相変わらず開いていた。空調機を使わないから、少しでも風が抜けるようにしているのだろう。古き良き昭和の時代が顔を出す。ラムさーんと下から声をかけて、悲鳴を上げる階段を駆け上った。相変わらず乱雑とした玄関には、昨日の空缶が燃えるごみの袋に詰められていた。玄関と何ら境のないキッチンで、ラムさんは料理を作っていた。クンさんはまだ寝ているようだ。

「こんにちは、ごはんいっしょに、たべる？」

こんな厳しい状況下でも、屈託など一切ないこのラムさんの陽気さが僕は好きになっていた。僕は「全然食欲ないから」とやんわり断った後、「そんなことより」と僕は今なら全てのベトナム人に短期滞在ビザというものが与えられること、それがあれば今の曖昧な状態から抜け出せること、このビザを取ってから、他のビザに切り替える道を探せばよいこと、この話は、ビザの専門の先生から聞いたことを説明した。ラムさんの日本語能力なら、日本語検定というものを受ければ、違うビザが取れるかもしれないことも伝えた。

何度も、必要以上にうなずきながら聞いていたラムさんの顔には、疑心の色があった。

「それは、べんごしのせんせいが、いってたのですか？」

弁護士ではなく、行政書士だったが、説明がややこしくなるので、僕はそうだと答えた。どちらも先生と呼ばれるし、似たようなものだ。

ラムさんはそのビザのことは、Facebookなどで見て知っていたが、自分が入管に行くと捕まってしまうと考えていたらしい。寝ぼけたクンさんにベトナム語で説明すると手をたたいて喜んでいた。僕も嬉しく、誇らしい気分だった。僕も一緒に行くから大丈夫だと安心させて、すぐ入管に行ける日を調整するように指示した。ラムさんから中島さんに電話すると、月曜日はもう仕事が入っているから駄目だと言われたが、火曜日なら二人とも休んでいいと言われたので、三人で火曜日の朝から入管に行くことにした。もうラムさんに潜む暗鬼は姿を消していた。喜びと期待が部屋中に満ちていた、初めての遠足のように火曜日が待ち遠しく感じた。止めていた火を再びつけて、ラムさんが料理を再開した。僕は帰るといったが引き止められ、ラムさん特製のチャーハンを振舞われた。味の素とナンプラーをふんだんに使った濃い味付けに舌も驚いていたが、直に慣れた。昨晩のように外まで送ってくれた。途中、雨が降り始めた。シャワーのように心地よい小雨だった。

火曜日が来た。日曜日から引きずられるようなあいにくの悪天候だったが、心は晴れやか。月曜日の朝のうちに、どうしても火曜日に休みが欲しいことを部長に伝えると、理由を聞かれたが、適当にごまかした。ぶつぶつ言ってはいたが、ここまで真面目に労働者をこなしてきた僕の権利を妨げることはできないと観念してくれた。僕の旅立ちの日もあと三週間に迫っていたが、それが霞むくらい今日という日は特別だった。

八時にA駅で待ち合わせの約束をしていたが、僕は早めに寮を出た。A駅には集合時間の一〇分前についたが、すでに改札の前で二人は待っていた。僕の分の切符も買ってくれていた。お金を渡そうとしても、いい、いいと断られた。電車の中は満員というわけではないが座れなかったので、僕たちは無言で電車に揺られた。

目的の駅から徒歩十分ほどの距離に名古屋出入国在留管理局がある。存在はかろうじて知っていたが、日本国民である自分がお世話になることはないので、気に留めていなかった。電車から降りると雨は激しくなっていた。携帯でマップを確認しようと思ったが、駅には多くの外国人がいて、みな目的地は同じようだった。見るからに陽気そうな南米人、ヒジャーブで顔を覆ったムスリムの女性、どこかの英会話教室で英語の先生でもしていそうなオーストラリア人、野球帽をかぶった東南アジアの人、ざっと見るだけで多種多様な人々がいた。こんなに多様性がある駅も市内ではここくらいだろう。入管に向かう一団に追従しているときに、ラムさんが聞いてきた。

「びざ、もらえるかな？」

かならずもらえるよ、と僕は短く返した。ラムさんは不安そうな顔を引き締めて前を向いた。

線路沿いの高架下を抜けると、巨大な要塞のような建物

がみえてきた。高さは五階建てくらいだが、前面に窓がぎっしりと詰められ、刑務所のような威圧感がある。実際、不法滞在の人たちを収監する施設も兼ね備えているのだろう。島国日本を不法移民から守る強固な砦、この威圧感に二人も圧されているように見えた。

駐車場はもう一杯で、待っている車で長い列ができていた。当然建物の中も外国人で満たされていた。案内は多国語で書かれていたが、どこへ行けばよいのかよくわからなかったため、正面の部屋に入った。区役所のような作りで、住民票を取得するときのように、立って申請用紙を記入できるようなカウンターが至る所にあり、受付には列ができていた。まず受付で申請の方法を聞かなければと思い、二人を連れてその列に加わった。

「すみません、技能実習生だったんですけど、訳あって失踪してしまって、短期滞在というビザをもらいたいのですけど」

クールビズに準拠した涼しげなスーツを着た中年の男性にそう告げると、

「短期滞在への資格変更ねー」

と事務的な口調で、背後にある引き出しから手際よく申請書類を出してきた。失踪の理由など根掘り葉掘り聞かれるのかと構えていたが、全くそんな雰囲気ではなかった。

「二名ね、二人とも同じ？　じゃあこの変更届を書いて、うん、ここに書き方の例もあるから、よく見て書いてね。それで、バイトはするの？　うん、じゃあこれ、資格外活動許可の申請書も書いてね、これもここに書き方が載ってるから。書けたら、二階の窓口に持って行ってくださいね」

はい次！という感じで実に手際よく一気に必要な情報だけを押し込められて、僕たちは列の外に出された。近くのカウンターは全部埋まっているため、部屋の外のカウンターを使うことにした。渡された紙をみると、「在留資格変更許可申請書」と「資格外活動許可申請書」が共に三枚一組で、それぞれにまた三枚一組で、赤字で記入例が記されていた。項目は、在留カードの情報からパスポートの情報まで大量にあったが、ラムさんは自分で書くことができたので、僕はクンさんの代筆だけすることにした。在留カードとパスポートを見ながらまず在留資格変更許可申請書を記入していく、最後のページは変更の理由を書かなければいけなかった。これは少し考えて書く必要がある、と思い記載例を見てみると、赤のローマ字でＫＯＲＯＮＡと書かれているだけだった。なるほど、そういうことか。と石田先生の言っていた意味を理解した。コロナが理由で簡単にビザが取れるというのはこのことかと。入管側も膨大な量の手書きの申請書類に対応するために、ＫＯＲＯＮＡという魔法の言葉で手続きを簡略化しているのだ。記入例通りに在留資格変更許可申請書を書き終え、資格外活動許可申

請書に目を通すと、在留資格変更許可申請書とほとんど同じ様式で、題名のほか若干の違いしかないように見えた。

さっきより雑な字で急いで項目を埋めていった。先ほどから姿を消していたクンさんは、三本の缶コーヒーを持って帰ってきた。代筆の感謝の気持ちをわかりやすく表現したかったのだろう。やはり最後のページは資格外活動が必要な理由で、こちらも記載例にも、魔法の言葉が一字書かれているだけだった。

あとは証明写真を撮って申請するだけだ。二階に上がると、ここしかないだろうと誰が来てもわかるように申請の大部屋があり、ここも雑多な人たちの列で溢れていた。結構な割合でスーツを着た日本人も見受けられた。石田先生のようにビザを生業とする人たちなのだろう。階段を上がってすぐ小さなローソンがあり、証明写真の機械もみえた。その奥にイートインスペースのような広めの休憩所があったので、僕はそこで待っていることにした。二人は生き生きとした表情で感謝の言葉を述べながら、証明写真の小さな列に並んだ。全てがうまくいった気がした。思いもよらない形で、他人のためになることができたことに普段ない満足感があった。幸福感といってもいい。そんな心地よい感覚に浸っていると、休憩所を囲むガラス越しから二人が申請の長い列に加わるのが見えた。手を振る二人に手を挙げて答えると、安心感からか急に眠気が襲ってきた。

僕は机に身を突っ伏して少し眠ることにした。高校生が授業中に眠るときに取るあの姿勢で……

「ちょっと、おきてください。たすけてください。よくわからない。きてください」

ラムさんが早口で僕をゆすりながら言った。その声は震えていて、目覚めた僕は何が何だかわからなかった。よだれがついた手をズボンのお尻のほうで拭いた。クンさんはいない。真っ青になっているラムさんの顔が、何か、想定していない事態の発生を物語っていた。速足で歩くラムさんについて大部屋に入った。プロ野球の観客席に使われている椅子がずらっと並び、一席ごとに感染対策の張り紙が貼られている。受付にはクンさんと一見して厳しそうな風格のある背の高い男性職員が待っていた。

「あなたは、この方たちの監理団体の人ですか？」

「いえ、違います。僕は彼らの友人で、付き添いできました。何か問題でもありましたか？」

「ああ、そうですか。こちらの人はこの手続きで問題ないですがね。もう少し待っててもらいます。そちらの人は別の手続きになりますから。ちょっとこちらに来てもらいます」

そう言うと職員はラムさんを誘導しながら、角にある個室の方へ向かっていった。

「違う手続きって、ラムさんはどうなるんですか？　ビザ

はもらえますよね？」

矢継ぎ早に質問をしながら二人についていこうとすると、男性職員にさえぎられた。

「本人だけです、あなたは関係ありませんから。」

地下鉄のホームに、ぽっと突き落とされたような感覚だった。関係ない。冷たい現実を感じた。ラムさんは助けを乞うような目で一瞥し、観念したように職員の後を追った。細身の背中は、花瓶の中のしおれた花のようだった。

クンさんは言われたことを理解しているようで、嬉しいのとラムさんがどうなってしまうのかという不安で複雑な表情になっていた。

「ラムさん、だいじょぶですか？」

わからない、という仕草をして僕たちは近くの椅子に座った。何も手につかなかった。あの職員の厳しい態度には冷酷さすら感じられた。そしてその色濃く残った記憶が、心の内から不安を湧きあがらせてきた。急転直下、今はもう悪い予感しかしなかった。クンさんはよくて、ラムさんはダメ、どこに何の違いがあるのかさっぱりわからない。どうなるのか？　強制送還？　聞いたことがある、割高の航空機で強制的に帰国させられ、その費用はしっかり後々まで取り立てられると。お金を稼ぐために日本に来たのに、むしろ借金を負わされて帰国するなんて、想像もしたくない。それとも入管の施設に収容されるのか？　スリランカ人が辛い目にあって亡くなったこの場所に？　刑務所と違い、刑期を満了しなくても出ることができる可能性が高い分、その可能性に関わることを収容者が申告すると、看守は疑う動機ができる。病気の申告は、仮病のレッテルでカウンターを受ける。負の連鎖、小手先だけの改善では何も変わらない、構造上の問題を抱えたこの施設に収容されるのは、何にも増して酷いものに思えた。ラムさんの連れていかれた室の方では何事もなかったかのように職員たちが動いている。個人にとっての非日常的な体験も、組織の日常に簡単に飲み込まれる。ラムさんが出てくる気配はない。

「２８番、２８番、短期滞在のライ・チー・クンさーん」

職員が２８番という番号の書かれた紙を頭上に掲げながら、マスク越しに声を張り上げた。クンさんは立ち上がり、その職員のもとに行くと受付の方に連れていかれた。まもなくすると、はにかんだような笑顔でクンさんは戻ってきた。その手にはパスポートがあり、その中には短期滞在９０日間というスタンプが押されていた。帰国を前提としているビザだが、これでもう不法滞在になる心配はなくなったし、資格外活動として週二八時間の労働も許可されている。この猶予の間に、クンさんは他の、中・長期滞在できるビザの取得に努めればいい。以前持っていた在留カードには穴があけられていた。

僕たちは無言で待った。ラムさんを連れて行った職員が

外に出てきた。刑務官のような制服がよく似合う。人は制服通りの人間になる、というボナパルトの言葉が頭に浮かぶ。続いてラムさんも出てきた。ひどく気落ちしているのが遠目からもわかった。ラムさんは誘導されるがままに、大部屋から外に出ていった。僕とクンさんは追いかけた。階上から、二人が一階の入口左側にある部屋に入っていくのが見えた。学校の教室二部屋分くらいの空間に、相変わらず野球の観戦に利用する椅子が並べられている。五組の外国人がすでに中にいて、一人で座っているのはラムさんだけだった。そこに僕たちも突入した。

「ラムさん、どうなってる？」

観念した罪人のように気落ちしたラムさんが無言で手にしていた紙を渡してきた。在留資格取消通知書と題されたその紙には、出入国管理及び難民認定法第２２条の４により、五月の一五日付でラムさんの在留資格が取り消されたことを通知していた。九〇日以上、在留資格に基づく活動をしていなかったこと、そして入管からの意見聴取通知書にも応じなかったことが理由として記載されていた。

ひどい実習環境から、失踪以外の選択肢のなかったラムさんに、こんな不公平な裁定が下るなんて信じがたかった。重い沈黙が流れていた。他の外国人たちも同じような状況で、そのような人たちを専門に扱う部屋なのだと、今更気付いた。無言しか似合わない空間。ラムさんを無責任に連れてきた自分を恥じた。

「グェン ヴァン ラムさーん」

先ほどの職員とはまた違う、若く背の高い、人のよさそうな男性職員がラムさんの名前を呼んだ。

「はい」

と僕は無意識に返事をした。ラムさんを連れて職員の所に行くと職員も僕の存在に対して困惑した表情を浮かべていたので、

「私は彼を支援している支援団体の者です。彼が意見聴取通知に応じられなかったのには理由があるのです。ぜひ説明させてください！」

僕は無我夢中で口から出まかせを走らせた。二階の職員に冷たく言い放たれた、あなたは関係ありませんから。という言葉がまだ胸に刺さっていた。

「そうですか、そういうことですね……では上席の者に相談してきますので、少し待っていてください」

意外に話が通じたことに驚いた。重い扉を開けて職員は中へと戻った。話を聞いてくれるかもしれない、取消も撤回できるかもしれない。淡い期待が胸をよぎる。すると次は、スキンヘッドの、先ほどの職員の上司と思われる職員が出てきた。いかめしいオーラが前面に出ている、いやあえて出しているような人だ。軍隊のように胸を張って直立のまま僕の方を見て言った。

「あなたですか、グエン ヴァン ラムさんの件で話がしたいというのは」
「そうです」と言いながら立ち上がると、
「それでは中へ」と扉の中に通された。
予期していなかったことに心臓は高鳴った。狭い廊下の右側には間隔をあけて扉があった。奥は多くの事務員でごった返していた。僕は二つ目の扉から、ドラマで見る警察の取調室のような部屋に誘導された。
「あなたはグエン ヴァン ラムさんの支援団体の人だとか」
両肘を机の上につき、威厳を保ちながら上席の男は話した。
「そうです、私は劣悪な環境下から失踪してしまった実習生を支援している国際協同組合の職員で、彼の短期滞在ビザを取るために同伴してきました」
僕はわざと興奮したような様子で話した。下手な嘘から職員の注意をそらしたかった。
「そうですか、それで話とは?」
僕は早口気味でラムさんの失踪に至る経緯と今日ここに来た経緯を話した。前の職場の労働基準違反ともとれる待遇に耐えきれなかったこと、その後どうしていいかわからず友人の住処を転々としていたこと、まだ幼い子供と多額の借金を祖国に残していること、専門家の先生の指示で今日ここに来たこと、僕が話している間、上席の男は、静かに、時折相槌を打ちながらしっかりと聞いてくれた。もしかしたら、決定が覆るかもしれない、そう思えるほど良い聞き手だった。穴の開いた防音仕様の壁にこの部屋は囲まれていた。
「あなたの話はよくわかりました。殊勝なことですね、こういう立場の外国人を支援するというのは。滅多にいない、滅多にいないですよ、本当に」
ゆっくりと暖かい南風のような言葉だった。僕の期待は頂点まで運ばれていった。
「しかし、残念ながら私たちではこの取消の決定を変えることはできません。ただもし異議があり、この決定に不服なら……」
すべての期待や希望が頂きから落ちていった。初めからわかっていたのかもしれない。だが、この目の前の、制服と役職通りに威厳を持つこの人に言われてようやく悟った。いくら駄々をこねてもほしいおもちゃを買ってもらえないと気付く子供のように、僕は敗北を感じ取った。二階での職員が言ったのは真実なのだ。僕は関係ない、関係ない者には何もできない。関係がないのだから携われないのだ。
上席の男は、入管法に基づいた異議の申し立ての方法、その場合の手順や大体のスケジュールなど丁寧に説明してくれた。一年以上かかる道のりになるでしょう、とも言っていた。その間、ラムさんはどのように生きていけばいい?

誰が生活の面倒を見て、借金は誰が返していく?　現実の可能性の中にある非現実世界について彼は話している。
「今回は退去強制という手続きなので、これに従って帰国すればまた日本に来ることもできるので。今回は諦めて、また日本に来る手助けをして上げたほうが賢明だと思いますよ」
立ち上がり、出口まで案内しながら上席の男は言った。気落ちしている僕を見て心底同情してくれているようにも見える。職責を全うする正しい市民、彼らのおかげで島国日本の治安は守られる。現代の防人。部屋から出ると最前列にラムさんとクンさんは座っていた。二人を隔てるソーシャルディスタンスが、現実を表しているように見えた。天国と地獄、光と影、帰国と滞在、二つの相反する言葉と状況が二人にはあった。
「どうでした……か?」
「だめだね、もう変わらないって」
「……しょうがないね」
ラムさんから落胆や悲しみの色は褪せていた。ありがとう、ありがとうと言って僕の体を軽くたたいた。感謝の念を伝播させる心地よいボディタッチ。沈黙のまま僕たちはただ座っていた。携帯も触らない。そのうち背の高い職員に呼ばれてラムさんが再び中に入っていった。通訳を入れて、今後の手続きの流れを説明されているのだろう。ラムさんが戻ってきて言った。
「さあ、帰りましょうか」
予定していたビザではなく、退去強制と書かれた紙を手に持って。
二週間以内に、帰国便のチケットをもって再出頭しなければならないらしい。外は変わらず雨が激しかったが、発する言葉を見つけられない僕にはありがたかった。僕たちは帰路に就いた。
駅からの帰り道で僕たちは解散した。アパートに寄ろうとも思ったが、もう日も暮れかけていた。雨は相変わらず降り注いでいたし、次の日の仕事を考慮したせいもあった。まだなんとなく話したそうにしていたラムさんの希望に沿ってあげられないことを感じながら、僕は二人と握手して別れた。
ラムさんとは、それが最後の別れとなった。次の日、ラムさんは当欠した。
いつものように事務所に出社すると、作業服だらけの集い場に似つかわしくないスーツ姿の初老の人がいて、それが誰か分かった時、すぐにラムさんのことだと気づいた。部長は案外さっぱりと、今日はフーと一緒に行ってくれ、と言ってこの問題を解決した。この会社では日常茶飯事の問題なのだ。

「うちはね、従業員の責任で勝手にやめていく奴らには厳しくしてるんですよ。大体あいつらはすぐに恩を忘れて、挨拶の次には金の話ですからね。もうほんとに今回も、往生こきましたよ。」

古株作業員相手にそんなことをつらつらと話していた中島さんの肉声を初めて聞いた。この古株作業員は、自分が上司のように振舞うことで、他の作業員から嫌われている。スーツの男と、自分だけ話が出来ていることが愉快で仕方がない、朝から幸福な古株。

僕はまだ理解ができなかった。どこかに行った？　昨日の夜のうちに？　なぜそんな急に出ていく必要があったのか、全く理解できずにいた。その日の単純作業中、新築マンション建設現場内の清掃中もずっと理解できずに、思考の迷路を彷徨っていた。

あっという間に一日が過ぎた。帰りにラムさんのアパートに寄ってみた。フーにはピノを買い与えて、この私的な寄り道を許可してもらった。部屋のドアは閉まっていて、ノックをしてみたが返事がなかった。明かりも灯っていない。まさかクンさんまで出ていったのか？　いや、そんなはずはないと思った。ビザも取れて、わざわざ、こんな急に出ていく必要があるわけがない。

その自分本位な推理の下、僕はこの日から旅立つまでの三週間の間に四度か五度、クンさんの家のアパートを尋ねたが、常に留守だった。回数を重ねるごとに、僕も自分の新たな旅立ちに気が向いていき、彼らのこともあまり考えないようになった。考えても仕方がない、出会いがあって、交流があって、別れがある。これからも経験するし、これまでも幾度となく経験してきた人間の営み。

退社の日が来た。みんなが毎日のように、昨日と、先週と、去年と同じように、六時に集合するとき、僕はバックパックを背負って寮を出た。四ヶ月近く懸命に働いたというのに、別れはあっさりとしたもので、最後の給料を現金で渡されると、「がんばれよ」と言って送り出された。「お前みたいなやつは珍しい」とも最後に言われた。昨日航空券とワー*ホリのビザを見せるまで信じていなかったらしい。自分自身を再生させる旅の始まり。本を目一杯詰め込んだバックのショルダーストラップが肩をえぐる。近所の駅からハブになっている総合駅に行き、そこから空港直通のスカイラインに乗って、躍る胸を抑えながら空港に向かう。出発は午前一一時半、現在時刻はまだ八時、全てが順調に滑りだしている。

国際線のターミナルは、ちょうど出国が緩和されている時期ということもあり、賑わっている。早めのチェックインを済ませて、出国審査に向かう。シドニーまでの直行便は長い道のりになるだろう。搭乗口付近のベンチには、ま

＊ワーホリ＝ワーキング・ホリデイ。18歳～30歳を対象にした自由度の高い海外留学制度。海外で留学しながらアルバイト・仕事ができる。

だ人がまばらにしかいない。ここまで来れば、何があっても乗り遅れることなどないだろう。珈琲でも買おうかと思ったが、少ない手持ちを浪費するべきではないと自身を諌め、搭乗口から少し離れた、テレビの見えるベンチに腰をかけた。初老の夫婦が前の列に座っていた。初日に泊まる場所も、今後働く場所も何も決めていない。それでいいし、それでも生きてやっていける自信がある。

「次のニュースです。昨夜遅くに名古屋市の中島茂雄さん宅で起きた強盗致傷事件で、犯人とみられるベトナム人の男、グェン ヴァン ラム容疑者がM駅近くの路上で逮捕されました。グェン ヴァン ラム容疑者は、盗みに入った民家で、家主である中島さんと鉢合わせ、持っていた刃物で中島さんの腹部を刺し、何も取らずに逃亡していたということです。取り調べに対し、グェン ヴァン ラム容疑者は、給料を取りに来ただけ、と一部容疑を否認しているようです。容疑者は技能実習生として来日した後失踪し、在留資格が取り消されている状態だったとのことです。警察は、中島さんと容疑者の間に何らかのトラブルがあったとみて、捜査を開始しています」

警察車両に乗ってうつむいている男の顔は、いっしょに入管へ行ったあのラムさんだった。

初老の夫婦の声が聞こえた。

「こいつらは、ビザを取って悪さして稼ぐために日本に来てるんだ。日本の治安がどんどん悪くなっちまう。人の家から金を盗もうとして、給料だって？　恐ろしいったらありやしないな。野蛮な連中を入国させる政府が腐っとる」

「そうよねぇ、ほんとに怖い世の中になったわ」

文芸思潮新人賞　優秀賞　受賞の言葉　壁　晃弘

昨今顕在化してきた、技能実習生の失踪という社会問題は、背後で少子高齢化による労働力不足や貧富の格差などあらゆる種類の他の問題とも絡み合っています。失踪した実習生の実習継続支援活動という唯一無二な活動の視点から、この社会問題と向き合い、この移民過渡期の現在を描いた作品を創りたい――受賞後は、そのようなことを考えております。

壁　晃弘

かべ　あきひろ

1989年生まれ
タイバンコク Saint John's International School 卒業
イギリス　ダラム大学国際基礎コース終了後、中退
鹿児島県霧島市在住

※この作品は選考会決定時点では「宝を後にして」という題でしたが、掲載に際し「ラムの不法労働」と改題しました。